コミュニケーション紀要
Vol. 21, pp. 1-34 (2010 年 3 月)

アメリカの「日本人」高校生の文化アイデンティティと社会化経験：
コミュニケーションエコロジー調査から[1)]

南　保輔

キーワード：情報／発達エコロジー、海外日本人、二分化併用、iShowU、日本語補習授業校

1　むつみのアイデンティティクライシス

むつみは米国西部のＳ市に暮らす16歳の高校生だ。アメリカ生まれで、生後数ヶ月からの２年あまりの日本暮らしをのぞくと、ずっとアメリカで生活してきた。高校生活も残り１年と数ヶ月という時期になって、自身のアイデンティティに悩んでいた。

Ｔ１　「何人かわからない」（むつみ）

調査者：いま、ご自身としては、何人だと考えていらっしゃいますか。

むつみ：（笑い）それがいまわからないんですね。まえは、アメリカに住んでいる日本人だと思っていました。それはそのとおりなんですけど、家では日本のカルチャー、家の外ではアメリカのカルチャーという生活をしていると、そのどっちなのかと迷うようになりました。アメリカ人にしては日本人がすごく強いわけです。親もおじいちゃんも、ひいおじいちゃんも日本人なわけですから、わたしも日本人です。でも、日本に住んでいる高校生とくらべると、あんまり日本人というかんじじゃないですし。

インタヴューにおいて、むつみはＴ１のように言っている。[2)]「何人」かという問いはアイデンティティを問うものだが、「それがいまわからない」。そもそも、本研究の調査協力者募集に応じてくれた背景には、この問題についてまとめて考えてみたい、話を聞いてもらいたいという家族の思いがあった。ちなみに、この質問を開始したところで、むつみは「いよいよ来たな」と言わんばかりに、ニヤッとしているのが印象的だ。

「何人」かという問いへの回答として、国籍アイデンティティと文化アイデンティティを区別できる。前者は、日本の戸籍があるか、パスポートはどこの国のものを使うかに直接関係する。むつみはアメリカ生まれであり、アメリカの市民権を持っている。そして、日本人の両親に生まれたということで日本国籍もある。二重国籍状態である。

むつみが「いまわからない」のは、自分の国籍に関することではない。「家では日本のカルチャー、家の外ではアメリカのカルチャー」と言っているように、文化アイデンティティについてである。「アメリカに住んでいる日本人」というカテゴリーがあって、自身はこれに該当すると「まえは」思っていた。だが、文化面で「どっち」か「迷う」ようになったということだ。

アイデンティティとそのクライシスについてまとまった議論をしたE. H. Eriksonは、青年期という発達段階の課題として自己同一性の確立を挙げている。「真に健康なパーソナリティ」にとって「内的な統一感覚」は不可欠なものだが（Erikson 1959=1973: 52）、思春期の身体的成長と性器的成熟によって、「同一性（sameness）」と「連続性（continuity）」とが揺らぐ。新たな社会的役割なども含めて自己を統合し、自己同一性を確立することが求められる（Erikson 1959=1973: 111）。

Ｔ２はＴ１に続く部分だ。自身のアイデンティティについて「わからない」という悩みが「さいきんの」ものだというのである。ここのところで、むつみが母親のほうに向かって発話しているのが特徴的だ。それに応えるように、母親が口を開く。「さいきん」というのが「ここ数ヶ月」のことだと特定している。

Ｔ２　「ここ数ヶ月アイデンティティを探っている」（むつみと母親）

むつみ：でも、日本に住んでいる高校生とくらべると、あんまり日本人というかんじじゃないですし。ほんとどうなのかなあって、さいきんの《悩みですね》。

母　親：（笑いながら小さく３回うなずく。そして、むつみに向かって２回うなずく）うーん、ここ数ヶ月すごく、（両手を上下に動かしながら）こうやっぱり、（むつみを向いて、うなずきあう）アイデンティティを、あの、探っているかんじがしますね。

同意を求められた母親はかなりの身振りをまじえながら話している。むつみのアイデンティティクライシスは、Eriksonも定式化しているように、青年期に一般的に見られるものだ。それが、「文化的」なかたちをとっているのがむつみの事例に特徴的なことであり、これについて６節以下で検討していく。

ここで、発達軸上の考察を加えておくことにしたい。アイデンティティクライシスはアイデンティティの確立が課題となる青年期にしばしば見られるものだが、むつみの場合16歳という暦年齢よりも、11年生の冬という学校制度上の地位がより強く関係していると言えそうだ。アメリカの大学は８月あるいは９月から新学年が始まる。出願は前年の10月から11月にかけて行う。選抜は、高校の成績とSAT（Scholastic Assessment Test, 大学進学適性試験）という統一試験の成績、そして小論文にもとづいてなされる。SATは全国統一試験であり日本の入試センター試験に似たものだが、年に７回実施されており生徒は複数回受験できる。だが、11年生の春から12年生の秋にかけての時期に受験したときの成績がもっとも重視される。

SATを受験し、出願する大学と専攻分野を考える段階である「さいきん」、「ここ数ヶ月」にクライシスが表面化している。つまり、将来の生き方を考えるなかで、自分が「何人」か悩むようになっているということだ。

Ｔ３　「子どももアメリカ人として生まれて」（むつみ）

調査者：それはやっぱり、ここ１年ぐらい、ちょっと気になってきた？

むつみ：そうですね。まえはそんなに考えなかったんですけど、さいきん、はい、考え出しましたね。でなんか、日本の音楽もよく聴くようになったし。日本のテレビももっとよく見るようになったし。

調査者：はいはいはい。

むつみ：将来のこと考えてたら、ずうっとアメリカに生きていったら、やっぱり子どももアメリカ人として生まれて、その子どももきっとアメリカ人と生まれて、で、そのうちあんまり、日本人っていうのが、ひびいてこないのかなって思ったりして。

調査者：はいはいはいはい。

Ｔ３はＴ２のちょっと後のところだ。犬が出てきてインタヴューが中断された後、調査者はアイデンティティクライシスの話題をさらに続ける。「気になってきた」のがこの「１年ぐらい」のことかと時期を特定しようとしている。

むつみは、「さいきん、考えだしましたね」と回答する。注目したいのが、将来生まれてくるであろう自身の子どもや孫が「アメリカ人」となって、「日本人ということがひびいてこない」のを気にしているという部分だ。「ひびいてこない」というのは、日本人らしさ、日本文化が関係なくなるといったことだろうか。子どもを持つことを強く意識するのは、Eriksonも指摘しているように思春期以降であろう。16歳になってアイデンティティクライシスを感じていることと関係があるだろうというのが、もう１点ここで指摘しておきたいことだ。

さて、このようなアイデンティティクライシスの事例に出会ったときに、どのような調査疑問が浮かぶだろうか。ひとつは、事例の代表性にかかわるものだ。むつみのような悩みは、アメリカに住む日本人高校生にとって一般的に見られるものなのだろうか。それとも、むつみに特有のものだろうか。調査法の用語で言うと、事例の代表性、あるいは、調査結果の一般化可能性にかかわる問いである。

もうひとつは、このような文化アイデンティティのクライシスを「結果」と見立て、その「原因」を探るという方向が考えられる。つまり、むつみはどんな暮らし、生活経験を送っているのだろうか、という調査疑問だ。とくに、言語・文化

にかかわる側面に注目したい。これは、むつみがＴ３において、「日本の音楽」や「日本のテレビ」に言及していることとも関係している。

以下、本論文においては、コミュニケーションエコロジーという側面からむつみのようなアメリカに暮らす「日本人」高校生の生活経験を見ていく。しかしことわっておきたいが、本論は、アイデンティティクライシスの「原因」といった実体論的立場をできるだけ回避したいと考えている。南は、アイデンティティを相互作用に埋め込まれた認知ワークとして捉えるべく、公的・私的、個人的・社会的という２つの軸でアイデンティティの整理を行った（南 1998)。本論においては、それに比べると「内側にある実体」としてのアイデンティティに近いようにみえるかもしれない。だが、当事者の「悩み・関心」あるいは、ゴフマン流に言う「ワーク」としてのアイデンティティ観を想定し志向していることを強調しておきたい（Goffman 1967)。

２　コミュニケーションエコロジーとは

「エコロジー（ecology)」は生態、あるいは、生態学と訳される。エコロジーということばが使われるとき日本では、自然環境保護という視点が強調されることが多いが、アメリカ社会科学の分野では社会環境を指すことばとしても使われている（Gibson 1979; Bronfenbrenner 1979=1996; Cicourel 1982)。

「アフォーダンス」という概念を唱えたギブソンは、『生態学的視覚論』４章の冒頭で以下のように書いている。

> ここでは、環境を知覚する観察者にとって有効な情報について述べよう。そうしておけば、観察者は環境をどのように知覚し、知覚活動がどのようなものから成り、また観察者は環境の中でどのように行動を制御することができるのか、といったことを考える下準備ができることになる。(Gibson 1979=1985: 51)

ここには「知覚する**観察者にとって有効**な情報」（強調は南）を問題とするという姿勢が見られる。客観的な「空間」ではなく、ヒトとして知覚可能な情報に照準するというものだ。以下の引用においては、知覚可能な「事象との関係で」ヒトは行動するのだと明言されている。

> われわれはだれでも見たり、感じたり、または匂いをかいだり、味わったりすることのできるものや、聞くことのできる事象との関係で行動するからである。(Gibson 1979=1985: 10)

情報環境（information environment）という概念がある。「人間が生活する上で日々必要な情報を入手し、蓄積し、編集し、他の人に提示するために日常的に利用する環境を言う」（はてなキーワードhttp://d.hatena.ne.jp/keyword/%BE%F0%CA%F3%B4%C4%B6%AD、2009年７月アクセス）とある。この名を冠したものには東京電機大学環境情報学部と東京工業大学大学院情報環境学専攻、京都大学情報環境機構などがある。いずれも、工学・エンジニア系の研究をしているようで、「情報環境」をどう作り上げていくかという発想のようである。

本論文が「エコロジー」ということばを使うのは、あるひとを中心に考えたいからだ。ひとの生活経験というのは、「客観的な」環境によって決まるのではなく、環境のうちのある特定の部分と、そのひとが相互作用をして生み出される。つまり、「同じ環境」に身をおいても、「同じように感じる」わけではないということだ。山道を歩いていて遠くに熊が見えるひとと、目が悪くて黒い塊としか見えないひとがいるだろう。[3] 本論の関心に引きつけたものとして、「同じ」音の連鎖を理解できる英語話者と、それができないひとという区別も考えられる。

「エコロジー」ということばを使う理由の２つめは、場の連鎖としてこれを考えたいからだ。「人間の発達研究にひとつの新しい視点を提起する」というBronfenbrennerは以下のように言う：

> 生態学的環境は、ロシア人形［マトリョーシカのことかと思われる（南注)］のようにいくつもが次々と内部に抱き合わされている入れ子構造のように考えられる。一番内側にあるレベルは、発達しつつある人を直接つつ

みこんでいる行動場面（セッティング）である。家庭や学校はもちろんのこと、研究目的によってはよく使われる実験室やテストルームがこの行動場面になりうる。ここまでは私たちにとってなじみのある場所である（これらの中にも、従来の研究者の目で捉えられたものよりもはるかに多くのものが含まれているのだが）。しかし二番目のレベルになると、慣れ親しんできた道から外れることになる。というのは、個々の行動場面を切り離して見るのではなく、いくつかの行動場面間の相互関係を見ることが必要となるからである。（Bronfenbrenner 1979=1996: 3）

この考えにたって子どもの発達を調査したのがColeたちの研究である（Cole, Hood & McDermott 1978）。残念ながら、この興味深い研究についてここでは紹介できないが、図１は、そのエッセンスを示している。[4]「生態学的環境」が「入れ子構造」となっていることを図１は示している。ミクロシステム、メゾシステム、エグゾシステム、マクロシステムという４つのシステムが入れ子状となっている。子どもの直近の生活世界であるミクロシステムは、家庭・学校・近隣・宗教場面と場面が分かれており、それぞれが独自のメゾシステムとエグゾシステムを形成しつつ、全体のマクロシステムを構成し影響されているという点も重要である。

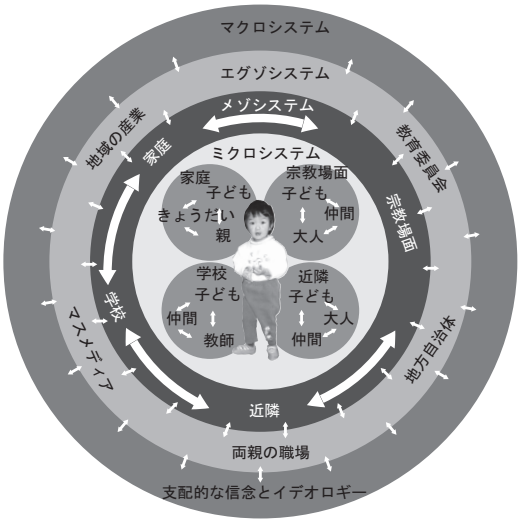

図１　人間発達のエコロジー
（Lightfoot et al. 2009:29 Figure1.4を元に作成）

Ｓ市の日本人高校生の生活経験を考えるときに、家庭と学校が重要なものであることは言うまでもないが、近隣と宗教場面の重要性は大きくない。学校については、現地校と日本語補習授業校とで区別する必要がある。主要な教育言語が英語と日本語というふうに分かれるからだ。そして、このような二言語併用生活を送っているかれらの生活経験を深く理解するためには、メディア接触を言語文化の点から見ていくことが必要となる。

３　調査と協力者

米国西部Ｓ市に在住する「日本人」高校生６人とその母親とにインタヴュー調査を行った。６人のうち５人はＳ日本語補習授業校（以下、Ｓ補習校）に在籍している。補習校での授業や昼休みの様子を観察調査し、補習授業校の教員からも話を聞いた。

	生誕地	現地校の学年	補習校の学年	渡米時年齢	「得意」言語	大学志望	出生順/きょうだい数	学業外の活動
ひとみ	米	12	高３	13	J	米	2/3	---
じろう	日	11	高１	6	J	未	1/1	---
みきこ	日	10	高１	3	E	米	2/2	バスケット
よしみ	米	9	中３	---	E	米	3/3	ピアノ
ごろう	米	12	高２	---	J	米	2/3	空手
むつみ	米	11	---	---	E	米	1/2	---

表１　調査協力者一覧

表１は、６人の調査協力者の基本属性である。生まれたのは日本かアメリカか、調査時の学年（現地校と補習校）、「得意」言語、日米どちらの大学を志望しているか、きょうだいの数と出生順、そして、学業のほかに多くの時間を割いている活動を一覧とした。

ひとみは現地校で12年生、補習校では高校３年の女子生徒である。アメリカ生まれなのでアメリカの市民権を持っている。生後１歳で日本に帰国し、中学２年の夏に再渡米するまで日本で「ふつうに」育った。英会話の勉強をしてはいたが、４年半前にやってきたときは「すごいたいへんだった」。いまも得意な言語は日本語である。[5] １歳年長の姉は、アメリカの高校

卒業後日本の大学を受験し合格している。ひとみは、アメリカの大学に行きたいと考えている。８歳年下の弟は英語のほうが優勢だという。

じろうは現地校の11年生、補習校では高校１年生である。日本で生まれ、６歳のときにアメリカにやってきた。滞米は10年となる。日本の学校経験は、夏の一時帰国時のものしかない。ひとりっ子で、日本語のほうが得意だ。小学校高学年のころに家庭で英語を話すことがあったが、母親に注意されて以後家庭では日本語のみとなった。大学は、日本とアメリカのいずれか、専攻内容も含めて自分に適しているのはなにかを考えているところだ。

みきこは補習校ではじろうと同じ高校１年生だが、現地校では10年生だ。[6] ３歳のときにアメリカにやってきて、いまでは英語のほうが得意である。３歳年長の姉がいて、アメリカの大学に通っている。みきこは、高校のバスケットボールチームに入っているので、練習や試合で忙しい。土曜日に対抗試合があり、補習校を欠課することも多い。アメリカの大学に行きたいと考えていたが、父親の仕事の都合で急に帰国が決まった。帰国子女受け入れ高校へ編入する予定で、将来はアメリカの大学で学ぶことを希望している。

よしみは現地校の９年生、補習校では中学３年生である。Ｓ市の多くの学校区では、高校は９年生から12年生までの４年間となっている。アメリカ生まれのよしみは、ずっとアメリカに住んでいる。２人の兄と同じくピアノを習っている。英語が優勢だが、日本語も得意である。アメリカの大学を考えている。

ごろうは現地校の12年生、補習校では高校２年生だ。アメリカで生まれ育ったが、日本語のほうが得意だ。兄と弟がいるが、家庭でも日本語を話す。空手を習っており、アメリカ代表として日本の大会に参加したこともある。大学はアメリカで行きたいと、SATに挑戦しているところだ。

以上の５人が日本語補習授業校に通っているのにたいして、むつみは通っていない。アメリカ生まれで、現地校の11年生だ。弟が１人いて、両親とは日本語で話す。アメリカの大学で学ぶことを考えている。

これら調査協力者の６人には平均２時間半のインタヴューを行った。インタヴューは、音声記録に加えて、ヴィデオカメラを使って映像記録も収集した。[7] 項目としては、生育歴・学校歴、言語使用・文化アイデンティティ、マスコミ接触・ＰＣ利用、現在の交友関係、将来の夢・職業希望、将来のパートナー、両親の希望、の７つである。本人との話が一段落したところで母親に加わってもらい、小さかったころのことや家庭の教育方針などを聞いた。むつみをのぞく５人には、生活時間を記録してもらった。これは、NHKのおこなっている国民生活時間調査を利用したもので、「時刻別（15分きざみ）の生活行動と在宅状況」を調べている（NHK放送文化研究所 2006: 2)。「調査相手」１人について、10月中旬の連続する２日間について調査している。

本調査では、ある金曜日から翌週の月曜日までの４日間を選んで記録してもらい、その直後にインタヴューを設定した。行動分類の一覧表も渡した（論文末の付録１。生活時間記録用紙は付録２）。また、その活動で使用した言語が、日本語であるか英語であるかについても記録してもらうようにした。この記録はインタヴュー時に話題とし、内容を明確にするよう努めた。[8]

南も練習のために、自分で生活時間記録をつけてみた。やってみて大変だったのは、ある行動を開始した時刻と終了時刻を正確に記憶しておくことだ。終了時刻はまだしも、開始時刻を特定するのがとくにむずかしかった。授業やテレビ番組といった時間割の決まっているものは別として、多くの行動がそうだろう。これから始めようと決めて記録してから、とりかかるといったことをするぐらいだろうか。調査協力者たちは、１日が終わって眠るまえに記入するということが多かったようだ。その信頼性にはかなりの留保が必要と思われた。

生活時間記録の信頼性を考えると、ＰＣログ記録の持つ意義は大きい。これは、パーソナルコンピュータの画面の動きをすべて記録するものだ。このような目的に使えるものとして、ソフトウェアの開発者がＰＣ利用の基礎データを収集するための、高価なユーザビリティテスティング専用ソフトもある。たとえば、アメリカ

TechSmith社のMoraeは１セットで1495ドルもする。だが、今回の調査にあたって、Windows OS用の手ごろなソフトを見つけることができなかった。それで、Macユーザーに限定して、ＰＣログ記録調査への依頼を行った。iShowUというシェアウェアがあり、20ドルのライセンス料で利用できたからだ。６人の調査協力者のうち２人がMacユーザーだったが、１人のMacはOSが古いためにこのソフトが対応していなかった。よしみが、ＰＣログ調査の唯一の協力者ということになった。

収集した記録の整理と分析手順についても簡単に述べておく。メインで使用したＰＣはMac Book Proの17インチ液晶モデルだ。ヴィデオカメラからAVCHDファイルを取り込んで、アップルのFinal Cut Pro 6とMPEG Streamclipを使用してmpeg4ファイルに変換した。これを、InqScribeというソフトを用いて文字起こしした。100ドルのソフトで、文字起こしだけであればこれほどのものは必要ない。画面に字幕キャプションを容易につけられるのが強みである。分析段階のデータセッションで重宝した。

４　調査の倫理問題について

調査倫理について近年関心が高まっている。とくにアメリカ社会においてはその傾向が強い。本論文が依拠している調査にあたっては、滞在先Ｓ大学の倫理委員会の審査を受けた。訪問研究者の身分だったが、日本の大学の資金で滞在費などをまかなっておりＳ大学とは雇用関係にはない。調査結果の報告をもっぱら日本の学会に絞るならば、必要ないということだった。

だが、南は社会調査士資格科目である「マスコミ研究法」（Ａ科目に該当する）を担当し、調査倫理はその重要項目のひとつだ。アメリカの社会科学研究における倫理問題取扱いの最先端を体験してみるためにも審査を受けることにした。本節の記述もやや冗長となるが、そういった事例紹介の意味も込めている。

Ｓ大学の倫理委員会の審査は、社会行動科学部門とそのほかの医療部門とに分かれていた。[9)] 南の調査が審査されるのはもちろん前者だ。審査委員会の会合は月に１回開かれる。申請書の提出期日は、その２週間以上まえに設定されていた。委員が前もって書類を審査するという手順なのだろう。南は11月から調査協力依頼を開始しようと考え、９月８日の会議に間に合わせるべく、８月20日ごろに申請書一式を提出した。修正指示があり次の10月の会議で承認されたが、最初の申請から承認まで２ヶ月の期間を要したことになる。

本調査でとくに問題となったのは、調査協力者が未成年であることと、ヴィデオカメラによって映像記録を収集するという点であった。このために、調査の趣旨と手続きを説明する依頼文書は、高校生本人用と保護者用とを作成した。調査に使用するオリジナル文書は日本語なので、その英訳を提出した。依頼文書の配付は日本語補習授業校で行ったので、校長の同意書も必要だった。

調査協力の意思表明は２段階となった。まず、本人と保護者の同意、承諾をえて、生活時間記録とインタヴューといったデータ収集を行った。その最後に、収集したデータ（音声記録・映像記録・ＰＣログ記録）を調査に使用する許可を求めた。データの公開範囲について５段階を設定し、どの範囲までの公開を認めるかを回答してもらった。このうちの音声記録公開承諾書を付録３として収録しておく。

インタヴューの映像記録が必要なのかという疑問があるかもしれない。だが、表情は発話理解の大きな助けとなることをその第１の理由として挙げたい。また、グループインタヴューでは、発話がだれに向けられたものかが問題となる。かつて、南は海外子女がそのアイデンティティを語っているときに発した重要な発話が、同席していた母親に向けられたものと解釈したことがある（Minami 2007）。音声記録だけだったために推測となったわけだが、映像があれば、その視線を強力な論拠とできたのにと残念に思った。今回、映像記録にこだわった第２の理由である。

音声記録にしても、映像記録にしても、調査者を含む調査チームが分析のために使用しているかぎりは大きな倫理問題となることはない。その公開をどのように行うかが問題である。調査協力者や、住所、学校名などを仮名とするこ

とはその基本である。口癖も含めて忠実なトランスクリプトを作ると、本人のみならず、そのひとを知る人びとにも特定可能となる。映像から画像を切り出して、論文に挙示するということは説得力や信憑性を高めるうえでは効果が大であろう。反面、調査協力者の特定につながるわけで、本論文においては特段の必要性もなくそのようなことはしなかった。

調査倫理と密接な関係にあるのが、調査協力者の代表性である。本論文の知見をどれだけ一般化できるかを評価するときの基礎資料となるものだ。Ｓ補習校の高等部には2008年11月の時点で約25人の生徒が在籍していた。[10] そのうちの４人から協力が得られたわけだが、かなりの日時と努力をかけた末のことだった。さらに協力者を増やしたいと、中等部３年生にも依頼を行うことにした。現地校では高校にあたる９年生に在学している生徒が大半だったからだ。よしみの協力が得られ、ＰＣログ記録も収集できることとなった。

むつみは補習授業校には通っていない。知人を通じてたまたま調査に協力してくれることになった。家族が南の調査のことを知り、アイデンティティに悩んでいるむつみにとって調査協力が自己理解の一助となると考えたからだ。

以下で明らかになることだが、アメリカの高校生の生活は忙しい。現地校と補習校という２つの学校に通っている日本人高校生はとくにそうなのだろう。調査協力を得るのに苦労することが予想された。協力への「謝礼」として、「コミュニティサービス」時間を出すことにした。アメリカの大学の入学願書には、高校時代にどのようなボランティア活動をしたかも書くことになっている。とくに、この地区の有力大学は、高校時代に60時間の「コミュニティサービス」をしていることを推奨している。本調査への協力に要した時間をこれに充当することとした。大学の倫理委員会に申請してＳ大学の調査プロジェクトとしたのは、これを行うためでもあった。

時間的負担に加えて、自身の生活や考え、とくに「交友関係」について話すということは、だれにでも気軽にできることではない。コミュニティサービス時間に魅力を感じている生徒や、自身のアイデンティティの悩みを語りたい生徒が調査に協力してくれたという感触がある。そういう意味で、補習校に在籍している日本人高校生の代表的なサンプルであるとはとても言い難い。だが、調査とはすべてそういうものではないのだろうか。

５　Ｓ市の「日本人」児童生徒

Ｓ市に居住する「日本人」高校生と言っているが、そもそも、それがどのような人びとなのかがまず問題となる。家族とともに生活しているケースが大半だろうが、日本からの留学生として暮らしている生徒もいるだろう。

アメリカに居住する日本人家族は、永住意図の有無で大別できる。日本企業からの駐在員は、日本への帰国を前提としている。アメリカ生活を「仮住まい」と感じていると、1970年代ロスアンジェルス地区で調査した箕浦は言っている（1984）。そうであっても、駐在が長期となってくると、子どもの教育などを考えてしばらくは帰国せずにアメリカに残りたいと考える家族も出てくる。子どもが高校生となって日本に帰国するのは、かなりの負担になるという日本の学校事情があるからだ（南 2000）。

当面の滞在のつもりで日本から渡米してくる日本人家族には、企業の駐在員にくわえて、研究者たちもいる。恵まれた研究環境を求めて、医学系を中心に多くの日本人がアメリカの大学にやってきている。Ｓ市にもそういう家族がかなり多く、今回の調査協力者の保護者にもそういった例が見られる。

Ｓ市の日本語補習授業校に子どもを通わせている家族を考えると、国際結婚組を忘れるわけにはいかない。カタカナ表記の名前を持つことでそれとわかる子どもたちだ。大半は、父親がアメリカ国籍、母親が日本国籍というカップルだ。というのは、家庭で子どもと接するのは母親が中心であり、母親の日常言語が英語で父親のが日本語であるという場合、子どもの第一言語は英語ということになる。アメリカ社会で暮らしていると、家庭の言語環境がそういったものだと補習授業校でついていくだけの日本語力を子どもが獲得し維持するのはむずかしい。Ｓ

補習校は、週に１日６時間の授業で日本の小学校・中学校の教科書の内容をカバーすることを目指している（ただし、高等部は別である）。そのために、日本の学校よりも多くの内容が宿題・家庭学習のかたちでカバーされる。母親の日本語が堪能でないと、宿題を見てやることができない。こういった事情から、母親が日本語を話さない家族が補習授業校に子どもを通わせることはほぼ不可能である。

Ｓ補習校は、毎年文集を発行している。これをもとに、高校２年生と１年生の子どもたちのあいだにどれだけ国際結婚家族の子どもがいるかを調べた。参考に、2008年度という最新年度の小学校１年生の数と、1990年に小学校１年生に入学し、2002年に高校3年生を卒業した学年のものも加えた。

	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３	高１	高２	高３
1998-2009 年度在籍数	85	80	76	76	63	59	39	33	25	14	10	
内国際 結婚組数	18	11	7	7	4	6	1	1	1	0	0	
1999-2010 年度在籍数	72	80	76	63	54	40	34	26	19	13		
内国際 結婚組数	10	10	10	6	5	4	3	2	2	1		
2008-2019 年度在籍数	84											
内国際 結婚組数	29											
1990-2001 年度在籍数	61	56	53	51	48	55	46	44	44	25	7	6
内国際 結婚組数	2	4	3	3	3	3	2	1	1	0	0	0

表２　Ｓ補習授業校の国際結婚児童生徒数

表２に見られるように、調査協力者たちの同級生にも、小学校低学年のころにはかなりの国際結婚組がいた。たとえば、1998年に小学校に入学した高校２年生の学年の場合、小学校１年生の85人中18人、２年生のときは80人中11人だった。それが、学年が進行するにつれてどんどん減っていっている。その減り方は、2008年度の高校２年生のほうが高校１年生の学年よりも大きい。この表に反映されているのは、高校生になって補習授業校に通っている子どもたちは、日本語の学習意欲が高く、成績も良い生徒たちということだ。もちろん、現地校と補習校の２つの学校のための勉強がたいへんでやめていくという子ばかりではなく、日本に帰国するという理由で転出していく子も多い。

言及しておくべきもうひとつのグループがある。それは、中学校などの学齢になって日本からやってくる子どもたちである。ひとみがやってきたのは中学校２年生のときだ。かつては、このような高学年の子どもを海外駐在に帯同するという例はあまり見られなかった。英語での授業についていけるようになるまでに２年から３年かかると言われているなか、中学生の子どもを連れて行くと、帰国時までに十分な英語力が身に付かないということが起こる（アメリカに長期滞在しながら英語力が十分ではない生徒たちについては、Kobayashi 2008が詳しい）。まして、教科学習まで考えるとそのリスクは大きい。大学出願時に帰国子女枠があるといっても、これを活用できる語学力や学力が獲得できないというわけだ。

高学年の子どもを海外に連れてきた場合、現地校の勉強に専念させるという戦略が推奨される。日本語の基礎はしっかりしており、補習校に通わせなくても将来日本語で大きく困ることはない。それよりも、早く英語を身に付けさせて、現地の学校でやっていけるようにするべきなのだ。こういった事情から、中学校のときにやってきて、ずっと補習校に通い続けているひとみのような生徒は少数派である。

６　生活時間配分

５節まで調査の概要と調査協力者の特徴を述べてきた。本節以降調査結果を紹介していく。まず、高校生たちの生活時間配分を見よう。表３は、平日と土曜日、日曜日について、Ｓ市と日本の高校生が１日平均どれだけの時間当該行為をしているかを示している（NHK放送文化研究所編 2006: 250）。とくに差の大きい「家庭学習」と「インターネット・メイル」については、平日の日本のものの「行為者率」と「行為者平均」を示している。その「行為」をその日にまったく行っていないひとを含めると「行為者平均」が低くなってしまうからだ。

Ｓ市高校生のサンプルは平日が10日（５人

ｘ２日）で、土曜日と日曜日が５日ずつである。日本の高校生のデータは、平日が344日で、土・日が75日と71日となっている。調査の時期は、Ｓ市サンプルが2008年12月から2009年２月のあいだ、NHK調査は2005年10月である。約３年の違いがある。南の調査では、各協力者が平日２日（基本的に、金曜日と月曜日）と土・日の記録を収集したが、NHK調査では、約35人ずつが、２週間の調査期間中連続する２日の記録を収集している。サンプル（「調査相手」）に対する有効回答率はほぼ60％となっている（NHK放送文化研究所 2006:2）。[11]

	Ｓ市と日本（サンプル数）	睡眠	授業・学内の活動	家庭学習	インターネット・メイル	テレビ・ビデオを見る	通学時間	英語時間	日本語時間
平日	Ｓ市(10)	6:21	7:13	3:33	1:22	0:20	1:10	9:46	3:27
	日本(344)	7:07	7:01	1:48	0:18	2:03	1:23	---	---
	日本行為者平均	---	---	2:50	1:50	---	---	---	---
	日本行為者率	---	---	(63.4)	(16.0)	---	---	---	---
土曜日	Ｓ市(5)	6:12	6:09	1:09	1:28	1:27	2:14	2:28	9:02
	日本(75)	8:19	2:32	2:30	0:25	3:25	0:38	---	---
日曜日	Ｓ市(5)	9:53	0:24	4:34	2:47	1:24	0:12	2:46	3:37
	日本(71)	8:53	1:41	2:33	0:30	2:33	0:14	---	---

表３　生活時間配分のＳ日比較

（「時間：分」；括弧内はパーセント）

表３に見るように、平均の睡眠時間は平日でＳ市高校生が６時間21分、NHK調査では７時間７分と、Ｓ市高校生がやや短い。その差は土曜日で２時間以上と大きい。他方、日曜日の睡眠時間はＳ市の高校生が９時間53分とちょうど１時間長い。これは、補習校の授業が土曜日にあることを反映しているのだろう。

「授業・学内の活動」時間について、土曜日でいちばん大きな差があった。全員が補習授業校に通っているＳ市の高校生が６時間９分であるのにたいし、NHK調査では２時間32分である。日曜日はぎゃくに24分と１時間41分だが、Ｓ市のはごろうの空手活動をこれに含めたからだ。NHK調査のものが、学校のクラブ活動のものかあるいは模擬試験や補習といったものであるかは不明だ。

家庭（学校外）での学習時間は、平日の場合Ｓ市の高校生の３時間33分に対し、NHK調査は１時間48分だった。大きな差だが、日本の高校生ではその日にまったく家庭学習をしなかったという者もいる。63.4％という行為者率は36.6％、つまり３分の１以上の高校生が家庭学習をしなかったことを示している。家庭学習をした「行為者」で見るとその平均学習時間は２時間50分なので、Ｓ市との差はかなり縮まる。土曜日は１時間９分対２時間30分と大きく逆転するが、これはＳ市の高校生が補習授業校に通っており、帰宅後はリラックスすることが多く家庭学習をあまりしないからである。日曜日は、４時間34分対２時間33分とまたもＳ市の高校生平均のほうが長い。

通学時間については、平日はＳ市の高校生が１時間10分で、日本の高校生の１時間23分とはあまり差がない。土曜日に２時間14分対38分と大きな差があるのは、Ｓ市の高校生が補習校に通っているからだ。しかも、Ｓ市の端に位置する補習校の反対側の地域に住んでいる生徒が調査協力者に多かったという事情が関係している。

行為者率の差がとりわけ大きいのが「インターネット・メイル」だ。Ｓ市の高校生は全員がネットワークを毎日なんらかのかたちで使っているのにたいして、日本の高校生では16％が使っているだけだ。だが、行為者で見るとその平日平均は１時間50分でありＳ市高校生平均の１時間22分よりも長い。

これは、調査時期に2005年10月と2008年12月と３年の差があることにくわえて、日米の学習形態の影響も大きいと思われる。Ｓ市の高校生にとっては、ＰＣは学習の必需品である。現地校の宿題のエッセイ（小論文）はワープロでタイプして提出することが求められる。ＰＣは学校でも自由に使えるようになっているし、家族との共用であっても家庭にＰＣがありインターネットとは常時接続となっている。[12]

このような情報環境の変化と差異とが本論文のテーマであり、のちの７節７項でよしみのＰＣログを参照しながら詳しく論じる。ここでは、表３と直接関係する行動分類について注記

しておく。「インターネット・メイル」と「テレビ・ビデオ」のカテゴリーについてである。

南が調査協力者に渡した行動分類（付録１）では、「電子メイル」と「インターネット使用」を分けた。そして、NHKの調査票で「つきあい・交際・おしゃべり」に相当すると思われるものを、「会話・交際」、「電話」、「電子メイル」に細分した。だが残念ながら、協力者がこれらを区別していたとは感じられなかった。また、南の「インターネット使用」という分類はNHK調査では「趣味・娯楽・けいこごと・遊びでインターネットを使う」とほぼ対応していると思われるものの、たとえば、よしみは学校の宿題をしながらYouTubeで音楽を聴いていた。表３においては、「インターネット・メイル」とまとめて集計することにした。

もうひとつ、調査時には別の項目としていたが表３で合算したものに「テレビを見る」と「ビデオを見る」とがある。つまり、「インターネット・メイル」と「テレビ・ビデオを見る」としたわけだが、YouTube上に掲載された日本のドラマを見た場合にどのように記録されているのか。そんなことを考えるとこの分類もあやしくなってくる。表３のような集計データはこういったあいまいさを含んだものであるとことわっておきたい。

表３の最後の２つの列だが、Ｓ市の高校生の生活時間を「英語時間」と「日本語時間」とに分けてみた。起きている時間のうち、どちらの言語環境かが特定できる時間を集計したものだ。NHK調査にはこのような項目はない。平日は「英語時間」が９時間46分で「日本語時間」が３時間27分、土曜日はこれが逆転して２時間28分と９時間２分となっている。日曜日は、２時間46分と３時間37分というふうに、どちらともいいがたい時間が多かった。たとえば、英語のテレビを見ながら母親と日本語でおしゃべりをしているといったように「両方」と言うべき時間が少なくなかった。

６－１　土曜日の過ごし方

ここまで、Ｓ市の高校生の生活時間配分の平均をNHK調査結果と比較してきた。さらに、土曜日、日曜日、平日と１人ずつを取り上げて、Ｓ市の高校生の生活時間の具体例を見ていこう。まず、土曜日の過ごし方についてひとみの例を見よう（表４）。

開始時刻	終了時刻	分	ｺｰﾄﾞ１	ｺｰﾄﾞ２	言語	主たる活動
0:00	6:45	405	1			睡眠；6:45起床
6:45	7:15	30	3			着替え・化粧
7:15	7:45	30	14			車で移動：SATテスト会場へ
7:45	8:00	15	7			SATテスト開始を待つ
8:00	12:30	270	7		英語	SAT受験
12:30	12:45	15	14			車で帰宅
12:45	13:00	15	2		日本語	昼食
13:00	14:00	60	14		両方	補習校へ車で移動
14:00	14:25	25	7		両方	数学の授業
14:25	14:35	10	16		日本語	休憩時間
14:35	15:20	45	7		両方	SAT math の授業
15:20	15:30	10	7		日本語	ホームルーム
15:30	15:45	15	7		日本語	教師との面談
15:45	16:30	45	14		両方	車で帰宅
16:30	17:00	30	10		日本語	買い物
17:00	17:15	15	3			身の回りの用事
17:15	18:45	90	28		英語	iPod touchで映画視聴：『Almagedon』
18:45	19:00	15	9		日本語	夕食準備
19:00	20:30	90	2	16	日本語	夕食
20:30	20:45	15	9		日本語	食後の片づけ
20:45	21:20	35	28		英語	映画視聴の続き：『Almagedon』
21:20	22:00	40	16		日本語	ボーイフレンドとおしゃべり
22:00	22:40	40	16		日本語	母親とおしゃべり
22:40	23:00	20	9			部屋の片づけ
23:00	0:00	60	3			シャワーと歯磨き
		1440				就寝は翌日午前１時

表４　ひとみの土曜日

現地校12年生のひとみは、大学の合否に重要な意味を持つ統一テストのSATを調査対象の土曜日に受験した。午前８時から12時30分までだった。その後帰宅して昼食をとったのちに補習校へ行く。父親が車で連れて行ってくれたが、約１時間かかっている。５時間目の数学の授業の途中から出席し、６時間目のSAT数学を受講し、その後補習校の教師と面談をして帰途につく。途中で買い物をして、午後５時に家に帰り着いた。

日本人のボーイフレンドが自宅に遊びに来ていっしょに映画『アルマゲドン』を見たが、こ

れにはアップル社のiPod touchを使っている。小さな液晶画面を２人でのぞきこむようにして見た。夕食で中断後も映画の続きを見る。しばらくおしゃべりをしたあと、ボーイフレンドはいっしょに来ていた家族と帰っていった。その後ひとみは母親とおしゃべりをして、自室に引き上げる。眠ったのは翌日の午前１時だった。

その場で使われている言語としては、SAT受験は英語である。補習校では日本語だが、SAT数学は問題が英語で書かれているのを日本人教師が日本語で解説するということになる。家族やボーイフレンドとの会話は日本語だ。通学の車内ではiPodで音楽を聴いていることが多いが、日本の音楽もアメリカの音楽もどちらも聴く。ひとみによると、「ノリノリの曲」はアメリカのものが好きで、静かな音楽は日本のものだ。気分に応じて聴く音楽を決めるということだ。

補習校に通うほかの４人の土曜日の過ごし方も似たようなものだ。朝起きて、補習校まで親に送ってもらう。Ｓ市がある州では16歳から自動車運転免許を取得できるのだが、補習校に通う調査協力者５人はだれも免許を持っていない。授業が終了した３時半すぎに、迎えに来てもらって家に帰るというパタンだ。みきこは現地校のバスケットボールチームに入っていて、調査当日に試合があった。そのために、補習校を早退している。帰宅途中で日本の本屋に立ち寄って、雑誌『セブンティーン』を買っている。みきこは日本のアイドルが大好きで、『セブンティーン』と『明星』を毎号欠かさず読んでいる。

ごろうは、土曜日は朝４時まで起きていた。補習校の卒業アルバムづくりのためだ。かつて小・中学生だったころは、補習校の宿題のために、金曜日は夜遅くまで起きていたことだろう。「魔の金曜日」ということばが補習校に子どもを通わせている家族のあいだにある。平日は現地校の宿題や習い事に忙しくしており、授業日の前日である金曜日になって補習校の宿題に取り組む。それがなかなか終わらず夜遅くまでとなり、親子げんかに発展することも多い。このような事情を表現するものだ。補習校の高等部はそれほど宿題は多くないのだが、土曜日の補習校のために金曜日に夜更かしするというパタンは変わらないようだ。

６−２　日曜日の過ごし方

つぎに、じろうの日曜日を見よう（表５）。調査対象の日曜日、じろうの父親は日本へ出張中だった。じろうは小さいころはリトルリーグチームに入っていた。いまは草野球チームに父親といっしょに入っていて、シーズン中は日曜日の午前中に試合がある。だが、12月のこの日はシーズンオフで試合はなかった。気分転換のためにフットボールをテレビで見ながらも、学習中心の１日である。現地校の数学と科学の宿題がたまっていた。午後には歴史、そして、SATの受験勉強もしている。いつもの日曜日には数学の家庭教師に来てもらっているが、この日は冬休みで来なかった。母親の買い物に荷物持ちとしてついていくことも多いが、この日は行かず「なにもやっていない日曜日」だった。

開始時刻	終了時刻	分	ｺｰﾄﾞ１	ｺｰﾄﾞ２	言語	主たる活動
0:00	7:00	420	1			睡眠
7:00	7:15	15	1			睡眠；7:00起床
7:15	7:30	15	2		日本語	朝食
7:30	7:45	15	3			身支度
7:45	8:15	30	25		英語	新聞を読む
8:15	9:00	45	8		英語	現地校の宿題
9:00	9:45	45	23		英語	テレビでフットボール観戦；「気分転換」
9:45	10:30	45	8		英語	現地校の宿題：数学と科学
10:30	11:45	75	23		英語	テレビでフットボール観戦；「気分転換」
11:45	12:00	15	26		日本語	日本語の読書：乃南アサ『凍える牙』
12:00	12:45	45	2		日本語	昼食；母親と
12:45	13:45	60	22		両方	インターネット
13:45	14:15	30	8		英語	SAT試験準備
14:15	15:00	45	33		日本語	ニンテンドーＤＳ：脳トレーニングソフト
15:00	15:30	30	8		英語	現地校の宿題：歴史
15:30	16:00	30	30			休息
16:00	17:30	90	8		英語	SAT試験準備
17:30	18:30	60	26		日本語	日本語の読書：乃南アサ『凍える牙』
18:30	19:30	60	2		日本語	夕食；母親と
19:30	20:45	75	8		英語	数学のテスト勉強
20:45	21:30	45	22		英語	インターネット
21:30	22:00	30	3			入浴と就寝準備
22:00	0:00	120	1			睡眠；22:00就寝
		1440				

表５　じろうの日曜日

アメリカの大学は入学者の選抜において、S

ATなどの統一試験のほかに高校の成績を重視する。とくに、10年生と11年生の成績が選抜に用いられるので、じろうは良い成績を取るべく学校の宿題に取り組んでいる。これらの学習とテレビはすべて英語でこなすが、読書は日本語のものを読んでいる。この日読んでいたのは乃南アサの『凍える牙』だ。好きな作家は司馬遼太郎で、『龍馬がゆく』と『燃えよ剣』が愛読書である。また、気分転換にニンテンドーＤＳゲームをしているが、脳の訓練のような学習もののソフトである。日本の大学受験生と比肩しうるような「受験戦士」ぶりではないだろうか。

日曜日をこのような「まじめな」高校生としてすごしたのはじろうに限らない。ひとみは現地校の環境科学の課題で、地球温暖化による海水面上昇を示す模型を作った。７時間にわたってこれを行い、母親にも手伝ってもらっている。みきこは体調不良で５時間昼寝をした。元気で時間があるときはアメリカ人の「大親友」とショッピングモールの映画館に行くことが多いが、この日曜日は前日に購入した『セブンティーン』を読んだりして静かにすごした。よしみは履修しているジャーナリズムという科目の課題のために新聞を読んだり英語の課題図書『Of Mice and Men（邦訳：ハツカネズミと人間）』を読んだりピアノの練習をしたりネコを散歩させたりして過ごしている。ごろうは空手の練習場の掃除に行った。空手は学校のクラブ活動というわけではないが、日本の高校生のクラブ活動に類するものだろうと考えて学校活動に分類した。

６-３　平日の過ごし方

最後に、みきこの月曜日を見ておこう（表６）。授業は７時40分から始まる。12時15分で午前の授業は終わる。お昼休みは40分間だが、みきこのスケジュールでは昼休み後は授業が入っていない。午後１時45分から３時までバスケットボールチームの練習だ。これは、一部の時間が体育の授業として換算されるものだ。帰宅後は、数学と世界史の学習に２時間15分、生物学の学習に１時間30分と家庭学習の時間をしっかり取っている。みきこは将来、大学で海洋生物学を専攻しようと考えている。

開始時刻	終了時刻	分	ｺｰﾄﾞ1	ｺｰﾄﾞ2	ｺｰﾄﾞ3	ｺｰﾄﾞ4	言語	主たる活動
0:00	6:45	405	1					睡眠；6:45起床
6:45	7:00	15	3	23			日本語	身支度；テレビ
7:00	7:15	15	2	23			日本語	朝食；テレビ
7:15	7:20	5	14	16	27		両方	通学；車内で音楽
7:20	7:40	20	16				日本語	会話・交際
7:40	12:15	275	7				英語	高校の午前の授業
12:15	13:45	40	7	2	16		英語	昼食
12:55	13:45	50	7					休憩
13:45	15:30	105	7				英語	バスケットボールチームの練習
15:30	15:40	10	14	16	27		日本語	帰宅
15:40	17:00	80	22	18	16	27	日本語	インターネット使用
17:00	19:15	135	8	27			両方	現地校の学習：数学と世界史；音楽
19:15	20:15	60	2	29	16		日本語	夕食；テレビ；おしゃべり
20:15	21:45	90	8	27	30		両方	現地校の学習：生物
21:45	0:00	135	1					睡眠；21:45就寝
		1440						

表６　みきこの月曜日

みきこの生活時間記録で特徴的なのは、ひとつの時間帯に多くの行動コードが記録されている点だ。高校からの帰宅後、午後３時40分から５時までの80分間には４つのコードが記入されている。これらは、「インターネット使用」、「電子メイル」、「会話・交際」、「ラジオ以外で音楽を聞く」というものだ。ＰＣでのメイルチェックはウェブサイトでのニュース閲覧と平行して行われる。みきこが使っているMacＰＣでブラウザーを起動すると、日本のMSNのサイトが開くようになっている。hotmailやGoogleのアカウントでメイルをやりとりしている場合、メイルソフトではなくウェブブラウザーを使うために、「インターネット使用」と「電子メイル」は区別できない。そのために２つのコードということになったかと思われる。「会話・交際」は、母親とおしゃべりしながらだからである。そして、音楽をiPodで聴きながらこれらの活動をしたので、同じ時間帯に合計４つのコードが記録されている。

みきこは英語のほうが得意だが、日本語での会話や学習にもまったく支障はない。MSNで日本のニュースを見たり、夕食時には日本のテレビ番組を見たりしている。また、過去にＳ市

に滞在し補習校で友人になった日本人が日本に帰国していたり、テキサスやカナダに引っ越していったりしているが、そういう友人と電子メイルをやりとりしている。

ごろうは平日に空手の練習を２時間している。その往復には１時間半かかり、やはり車内で音楽を聴いている。よしみは学校のそばに住んでいて徒歩通学している。ジャーナリズムの授業では新聞記事を書く課題があるが、学校のすぐ近くに住むことの利点というタイトルの記事を現在作成中だ。この授業のために、Ｓ市の地方紙をウェブサイトでせっせと読んでいる。そして、毎日１時間のピアノ練習は欠かさない。

バスケットボールや空手、ピアノという活動を除くと、５人全員が学業中心にすごしている。ひとみは英語の授業で取材をしてエッセイを書く課題が出ている。虐待をされた子どもというトピックを選び、母親の知人で虐待児のサポートをボランティアでしている女性に１時間のインタヴューをしにいっている。

最後に、全員補習校のための学習はしていないことも確認しておこう。現地校の学業と課外活動を中心とした、「アメリカ人高校生」としての生活をしている。

７　言語使用の諸相

生活時間配分を見たところで、言語使用について詳しく見ておこう。高校生がかなりの時間を過ごしている現地校の学習や交友場面、補習校やインターネットといった情報・言語環境における言語使用の特徴から、かれらの文化アイデンティティを浮き彫りとすることをねらいとする。

調査協力者の６人は全員、家庭では両親と日本語で話している（Ｔ４）。

Ｔ４　「家ではぜったい日本語と決まってる」(みきこ)

調査者：ことばはどうですか、家庭では。おとうさん、おかあさんとは？

みきこ：あのう、いえではぜったい日本語と決まってるので。はい、日本語を。姉とはときどき英語になりますけど、でもぜったい、いえのなかでは日本語を使うようにしています。

Ｔ４は、みきこに家庭で両親と何語で話すかと尋ねているものだ。３歳年長の姉とは「ときどき英語に」なるが、「いえではぜったいに日本語と決まって」おり、「いえのなかでは日本語を使うようにして」いる。ただ、「ぜったい」を２回繰り返し、「使うようにしている」という表現から、みきこは日本語を話す努力をしている、それが必要な状況であることもうかがえる。３歳のときに渡米して13年間アメリカで暮らしてきたみきこは、そういう自制の努力をしなければ英語を使ってしまうという言語使用バランスにあるのかもしれない。

よしみも家庭では両親と日本語で話すが、英語話者もいっしょにいるパーティのような場面では、両親と英語で話すこともある。そのような機会がどれぐらいあるかは家族によって違う。よしみの家族は父親の仕事の関係で現地アメリカ人とのつきあいが少なくないようだ。

７－１　現地校の学習と言語使用

現地校の学習に関わる部分をまず見よう。授業中はもちろん英語である。S市の高校のなかには外国語科目として日本語が選択できる学校もあるが、調査協力者で日本語を外国語として履修している生徒はいない。[13)]

教科内容の知識や基本概念が日米どちらの言語から入っているかは、生育歴によって異なる。中学校２年生まで日本にいたひとみは、「気温上昇」といったことばと関係する現象やメカニズムは日本語のほうが早く理解できる。Ｔ５はひとみの生活時間調査の記録用紙を確認しているときのやりとりだ。環境科学の宿題をやっていた時間帯に、「日本語から英語」という表記があったのでこれはどういう意味かと調査者がたずねた質問に応じる部分である（Ｔ５）。

Ｔ５　「気温上昇」はまず日本語で調べる（ひとみ）

ひとみ：ああ、それはなんかやっぱり。地球温暖化についてすごい興味があるっていうか、真剣に取り組めるんですね。そうすると、地球温暖化について知ってるのは、日本でいろんなものを知ってきたからっていうかんじで。だから、単語的には日本語の知ってることが多いんです。「気温上昇」とかいう

の日本語だったりとか。そうすると、日本語でタイプして調べて、日本語のほうが早く読めるから、ザーと日本語で読んだあとに、英語で似たようなリンク探して、そしたら理解しやすいからっていうかんじで。最初から英語にすると、単語とかわからないとほんとに時間かかっちゃうから。そういうふうにしてます。

調査者：そういうことばを、たまたまこのトピックはそういうふうに？

ひとみ：あ、このトピックはたまたまそうだったんですけど、その、イングリッシュのあのう、虐待された子どものは、もう、日本語で調べないです。

調査者：なるほど、じゃあずっと英語で考える？

ひとみ：うん。それは英語です。

調査者：英語で考えて、まとめちゃう？

ひとみ：英語でやる、はい。

ひとみは環境科学の授業の宿題で、地球温暖化の影響の例として海水面の上昇を実際に水槽を使って示す模型を作っていた。そのメカニズムを説明する文章を英語で書くのに、最初日本語でウェブサイトを検索して概要を理解すると言っている。「日本語のほうが早く読めるから」だ。そのうえで、「英語で似たようなリンク」を読むと「理解しやすい」というのである。「最初から英語」でやろうとすると、「単語とかわからない」ことがあり「ほんとに時間」が「かかっちゃう」のである。

反面、日本語での基礎知識がないトピックもある。ひとみはイングリッシュの授業の課題プロジェクトで、虐待された子どもをトピックとしている。こちらは日本語で入っている知識はないということだろう、「日本語で調べない」。虐待された子どもの世話をしている女性へのインタヴューもふくめて、エッセイ執筆まですべて英語でやるということだ。

学習内容についての知識が言語と結びついており、そういった知識については当該言語で情報処理するのが効率的であるということを、ひとみの発言は示唆している。他方、すでに所有している知識内容に対応することばを新たに学習する負担を回避したいという考えも生じてくる。ごろうは英語よりも日本語のほうが得意だと言うものの、ずっとアメリカの学校教育を受けてきており、基本的な学習内容は英語で習得している。日本の大学に進学すると、それらを日本語の語彙として「ならいなおさなきゃいけない」、それが「いや」だと言う（Ｔ６）。

Ｔ６　「DNAは日本語でなんというのかわからない」（ごろう）

調査者：なるほどねー。じゃあやっぱ、その関係なんだろうね、日本語ね強いのは。

ごろう：はい。もう、日本の大学にも行こうかなって考えた時期もありますけど。でもやっぱり、あのう、やっぱり英語ーの人たち、アメリカ人も好きなんですよねやっぱり。でも、心のなかでこう思ったりしますしね。ずっとここで生まれて、まわりのひとがみんなそうだから。であとあのう、Ｓ補習校でもあの勉強するんですけどやっぱりねえ、Ｓ補習校のやったことーで、日本の大学行っても、日本語もやっぱりそんなにうまくないんですよ。だからついていけないと思うんですよね。

（略）

だからあのうにほーんの勉強にはついていけないかなって。科学とか習うじゃないですか、アメリカで。DNAとか、そういうのを習ったりしてるじゃないですか。

調査者：はいはい。

ごろう：そういうDNAっていうことばは日本でもDNAですけど、その、DNAはじゃあなんの略つったら、deoxyribonucleic acidなんですけど、あのーー、それを日本語でいったらなにっつたらまた最初からぜんぶならい、ならいなおさなきゃいけないじゃないですか。もう、（しみじみと）いやですね（笑い）。いやじゃないんですけど、たいへんだと思いますね。こうなるのわかるんだけど、先生に、あのこれ英語で書いていいですかっていうのを、やっぱできないと思うんでさすがに（笑い）。やっぱりだから日本のに、ついていけないかなーと思ってますね。だから、アメリカの大学にしか、手紙だしてないですね。

調査者：ん、ん、ん、ふーん。

Ｔ６の部分の直前のところでは、ごろうはいかに日本語が好きか、得意かが話題となっている。次項のＴ７で見るように、現地校の昼休みは「日本人」の友だちと日本語でおしゃべりしながら過ごしている。Ｔ６の冒頭で調査者が、ごろうが日本語が得意である事情に納得しているのはこういった話を受けてのことだ。

そうはいうものの、日本の大学に行こうと考えるわけではないとごろうは自発的に話し出す。その理由として、最初はアメリカ人も好きだと言うが、さらに、日本の大学での学習についていけないだろうと考えている理由を開示する。「ついていけない」というよりも、知っている内容に対応する日本語語彙を学習するのは「いや」だ、「たいへん」だということである。

ごろうが大学選びを自分から話題としたのは、調査者の関心でありインタヴューの重要トピックだと予期していたからだろう。ともあれ、日本の大学に進学したときのことを自分でもいろいろと考えているのを示している。そして、知識内容そのものではなく語彙の問題で学習の負担が大きいという理由からアメリカの大学への進学を希望して、日本の大学には「手紙」（出願書類）を出さなかったと言うのである。

７−２　現地校での交友

現地校で日本語を話すことがないのはむつみのほかにはじろうとよしみだ。あとの３人は、日本語を話す生徒が現地校の同じ学年にいる。だがごろうをのぞくと、あえて日本語で話すといったことはしていない。

ごろうは現地校で日本語をよく話している。かれにはまさるという親友がいて毎日、昼食休みの時間にはいっしょにランチを食べている（Ｔ７）。

Ｔ７　日本語は母語話者なみ（ごろう）

調査者：日本語のほうが得意？

ごろう：あ、ぜんぜん得意ですね。はい、ぜんぜん得意ですね。もう、毎日話してるからもう。たぶん、アメリカ人の英語はおれの日本語と同じぐらいか、おれの日本語ちょっと低いぐらいかだと思うんですよ。だからおれ、アメリカ人の英語はー、ぼくの日本語とおなじぐらいって認識してますね。

調査者：ふーん。そのう、お友だちていうかその、現地校に、日本人の友だちがけっこういた時期とかあるんですか。

ごろう：あ、いま、います。あの、まさるくんと同じ学校で。

調査者：あーそうなんだ。

ごろう：あのう、いま高３で、いまＳ補習校いってないんですけど、あのう、野口くんっていう子がいて、その子たちといつも話してますね。そのときはあのう、25分、30分ぐらいのランチのあいだはもう、その、まさるくんとジョン、あの野口くんジョンっていうんですけどあの、ジョンくんーとも話してます日本語で。

調査者：日本語で？

ごろう：はあ、きょうなんかももう、**ずっと**日本語で話してましたね（笑い）。ぜんぜん英語でしゃべんないです。

Ｔ７はＴ６の直前の部分だ。ごろうは「アメリカ人の英語はおれの日本語と同じぐらい」であると「認識」している。「おれの日本語（が）ちょっと低いぐらい」と留保を付けるものの、それほど日本語が「得意」だと感じている。アメリカに生まれて17年間、日本に一度も住んだことがない人間がこのように言うのは南にとって驚きだ。

ごろうがこのように感じている背景には、日本語で交友できる環境がこれまでにかなりあったと推測される。それで、現地校に「日本人のともだち」が「いた時期」があるのかと調査者は聞く。インタヴューの時点とはかぎらずとも、それ以前にそういうことがあったのかという聞き方をしている。

ごろうは「いま」２人も日本人の友だちがいて、ランチのあいだは日本語で話していると回答する。その２人はどちらもＳ補習校に在籍していた生徒だ。まさるは南もＳ補習校の観察を通じて知っている。野口ジョンはいまはやめているので直接は知らない。日本の学年が高校３年生であり、補習校の必要単位は取り終わっているからだ。

３人はいずれもアメリカ生まれであり、英語

でも「おしゃべり」をすることができる。ごろうは「きょうなんかももう、**ずっと**日本語で話してましたね(笑い)」と言っているが、言語使用の選択が可能ななかでも、あえて自分は日本語で話す。しかも、インタヴュー当日のランチでもそうだったと述べている。そして、「ぜんぜん英語でしゃべんないです」と強調している。

13歳まで日本にいたひとみは日本語のほうが得意だ。補習校では高校３年生であり、卒業要件は満たしているにもかかわらず補習校に通い続けている。それほどＳ補習校における日本語での交友関係を大切にしているということだ。ひとみの現地校にも、ごろうと同じように、Ｓ補習校に通う同級生がいる。彼女とふたりきりのときは現地校で日本語で話すこともあるが、そういうことはあまり多くない。ほかの友だちもいっしょにいることが多いので、「みんなと話してるときは、その子とも英語で話します」ということになる。

じろうは「日本語のほうが話しやすい」と言うものの、英語にも不自由していない。「英語が下手って感じるのは（現地校での）英語の時間ぐらい」で、「おしゃべりのときは、そこまで支障は感じません」とのことだった。じろうの通っている現地校に日本人の生徒はいるものの、彼女と話すことはないと言う。

５人のなかで英語のほうが得意と言ったのはみきことよしみだった。よしみはアメリカ生まれのアメリカ育ち、みきこは日本生まれだが３歳のときに渡米してアメリカ生活13年になる。よしみの通う現地校に日本人生徒はいるものの、学年がちがうために話すことはほとんどない。みきこの現地校にはＳ補習校に通う女子生徒がいて「親友」だが、現地校で会う機会はあまり多くない。週に１度の補習校が「親友」と話す機会だ。ちなみにみきこには「大親友」がいるが、彼女は白人のアメリカ人だ。土曜日の夜は彼女のところに泊まりに行って、日曜日はショッピングモールでいっしょに映画を見ることが多い。

Ｔ８　「ランチは大親友と」（みきこ）

調査者：で、お弁当のときはだれと食べるんですか。

みきこ：もう大親友のひとりとー、あと、同じクラスのふたりの男の子と。なんかもう、日によって変わりますね。

調査者：その、大親友の子は、あのうどんな子か教えてもらえますか。

みきこ：あの、白人で、５年生から、いや４年生からいっしょのクラス。いっしょのクラスが多くて。毎週ぐらいーお泊まりいってますね。

調査者：まいしゅう？

みきこ：まいしゅう、ですね（笑い）。

調査者：へーえ？その子とはなにが、うまがあうんですか。どんな共通点があるとかなんですか。

みきこ：もうなんか、気があう、みたいな。もう、自由、みたいな。

調査者：ふーん。その、いまバスケットかなんかのチームに入ってるんですか。

みきこ：あたし入ってますね。え、その子は入ってません。

調査者：ああ、そうですか。でそういうところの共通点があるわけじゃなくてーー。

みきこ：おんなじクラスもいっこもないんですけど、いっこもないんですけど。（間）でもなんか、いっしょにいるだけみたいな。

調査者：あーそうなんだ。どんなおしゃべりをするんですか。その、見た映画の話とか。

みきこ：しゃべるとして**すっごい**くだらないことしかしゃべんないんですけど。べつに、しゃべんないときもぜんぜんありますね。なんかもう、ふたりとも黙ってたりとかいう。それはもうべつに、ぜんぜん。

Ｔ８に見られるように、みきこは「普通のアメリカ人高校生」としてランチタイムをすごしている。大親友とは、話すことがなくてもいっしょにいて「自由」だと感じられるほどの関係だ。毎週末の土曜日に泊まりに行くほか現地校では毎日いっしょにランチを食べる白人の友だちがいるというのは、日本人の高校生にとってやや例外的とも言える。

７−３　Ｓ日本語補習授業校

むつみをのぞく調査協力者の高校生５人は、Ｓ日本語補習授業校に通っている。アメリカで生まれ育ったよしみとごろうはもちろん、３歳でアメリカに来たみきこ、日本の幼稚園で年長のときにやってきたじろうの４人は小学校１年

生からずっと補習校に通っている。中学校２年生の夏休みにやって来たひとみは、９月になって現地校が始まるまえから補習校に通っている。

５節で述べたように、アメリカで生まれ育ちながら２つの言語で現地校と補習校という２つの学校教育課程を学ぶ負担は大きい。表２に見たように、学年進行につれて在籍者が減少していくのはこれを反映してのことだ。Ｓ補習校の設立目的は、「一時滞米子女が帰国後、日本の教育環境にすみやかに適応できるように、日本の学校における主要科目の授業を行うこと」であり、５つある「本校の特色」の１番目として「日本の教育課程に準じた授業を毎週土曜日に、日本の教科書を使用して日本語で行っている」とある。

Ｓ補習校にたいする熱意がいちばん強いのはひとみだ。高校３年生の夏休み以後も通い続けているほどだ（Ｔ９）。

Ｔ９　「補習校が大好き」（ひとみ）

調査者：ねえ、高３になって、後期までいくひとって珍しいでしょうねえ。

ひとみ：いないですね。あの、去年いたんですけど、その子は単位が足りないから行かなきゃいけないっていうだけで、だから、すごい、自分から行きたくて行くっていうひとはめったにいないですね。

Ｓ補習校高等部は、高校３年生の７月まで在籍し単位を取得できれば「卒業」できるようになっている。これは、誕生日によって、高校３年生の６月に現地校の12年生を修了し秋から大学に進学する生徒が多いからだ。秋から現地校の12年生になる生徒で、あえてＳ補習校の高等部３年に通い続ける生徒は非常にまれだ。この学年はひとみだけであり、前年度にそういう生徒がいたが、それは単位不足からだった。授業料が月額約200ドルすることもあり、よほどの熱意がないと続けられない。ひとみには小学生の弟がおり、両親としては送迎の負担がひとみのために増すわけではないが、それでもひとみの熱意が高校３年生の秋以降に補習校に在籍しつづける決定因であることはまぎれないだろう。

ごろうもＳ補習校が大好きで通いつづけている。まさるという幼なじみもいる。まさると「いっしょでないと遊びに行かない」ほどだ。みきこもＳ補習校が好きで通いつづけてきた。急に日本帰国が決まり帰国子女受け入れ校の高校２年生に編入することになったが、補習校で日本語の学習を続けてきたので不安はない。編入する受け入れ校には先に、Ｓ補習校から帰国していった同級生も数多くいる。

じろうもＳ補習校が好きだが、高校２年生になっても続けるかどうか迷っている。というのは、日本の大学進学を考えると補習校よりも進学塾のほうが効果的だからだ。Ｓ市には帰国子女枠・海外学校卒業資格での日本の高校・大学受験の指導をする進学塾がある。Ｓ補習校の卒業生には、この制度を利用して最難関といわれる国立大学医学部に進学した生徒もいる。じろうは日米どちらの大学に進学するか迷っているということだったが、日本の大学受験を考えると、補習校ではなく進学塾のほうが選択肢となる。

よしみからはＳ補習校が大好きといったことばは聞かれなかった。だが、調査インタヴューの後にあったＳ補習校高等部への進学適性テストには出願して合格している。２人の兄は補習校を中学校課程卒業時点あるいはそれ以前でやめているので、高等部に通い続けるというのは本人の強い意欲の表れと見ることができる。それだけの学習時間などを費やすに値する場だと考えているのであろう。

７－４　文化要因と交友関係

高校生である調査協力者たちが「友だち」づきあいをするのは、現地校か補習校の同級生が中心となる。そのときに特徴的なのは、アジア系アメリカ人が多いことだ。たとえば、ひとみはランチをいっしょに食べるのは「コリアン」（韓国系）が多いと言っている（Ｔ10）。

Ｔ10　「ランチをいっしょに食べるのはコリアンが多い」（ひとみ）

調査者：で、じゃあ、ランチタイムと。でランチは、現地校のお友だちと？

ひとみ：そうですね。英語ですねだからずっと。

調査者：どんなお友だちが多いんですか、いっしょにランチ食べるような子は。

ひとみ：あー、コリアンの子が多いです。だからやっぱり、さいしょはなんかいろんな、あんまり関係なかったんですけど、何人とか。でも、去年ぐらいにその子と知り合って。そしたらやっぱり、コリアンの子のほうがアジア人てゆうのだけあって、日本のことわかるし、なんかいっしょにいてなんか楽だったんですね。それで、その子とすごい仲良くなって、それだからその子といっしょにいること多いですね。

調査者：その、グループじゃなくて、ひとりだけなんですか。

ひとみ：グループです。でもグループに、ほかにもコリアンだったり、ふつうに白人の子もいたりとかいろいろですけど。でも、すごい自由だから、ぜったいにそこじゃなきゃだめってゆうかんじじゃなくて、ミーティングがある子もいれば、どっか行かなきゃいけない子とかもいるから、なんかそのときによってひとが変わったりとかしますけど、でもだいたいはその、コリアンの子といっしょにいます。

調査者：で、そのとき、どんなおしゃべりするんですか。

ひとみ：あ、そのときによるんですけど。いろいろなんか、最近どんなことがあったとか。なんか、

調査者：エッセイがうまく書けないとか、

ひとみ：いや、お勉強の話あんまりしないです。でも、その子は数学があんまり得意じゃないから、数学をヘルプしてあげたりするかわりに、その子がエッセイ手伝ってくれたりすることもあるんですね。だから、まえの、想像力のこと書いたときに、あれ、どういうふうに直したらいいかっていうのを手伝ってもらったんですけども、でもふだん遊んでるときとかは、やっぱりお勉強の話とかには、なかなかならないですね。

以前の調査において、南はＳ市に住んでいる日本人家族の母親から興味深い話を聞いた。子どもが小さいとき、小学生のころは白人とも仲良くしている。学年が上がると白人とのつきあいが減って、アジア系アメリカ人と多くつきあうようになるというのだ。とても興味深いものであり、そのメカニズムがどのようなものであるかずっと気になっていた。本論文が依拠している調査の中核的調査疑問となった。

ひとみは「いっしょにいて楽だ」とコリアンの友だちのことを言っている。これは、Ｔ８でみきこが「大親友」といっしょにいると「自由」だと感じると言っているのと通じるだろう。そしてそのように感じる背後には、「日本のこと（を）わか」ってくれると言っているが、類似点が多いことが想定される。問題は、なにが類似しているのかという点だ。

そういうなかで、今回むつみから聞いた話が大いに示唆的だ。白人の友だちは遊ぶときに「ワイルド」なのだそうだ（Ｔ11）。

Ｔ11 「アジア人はワイルドなことはしない」(むつみ)

調査者：えっと、お友だちとかどうですか。

むつみ：お友だちは、アジア人が多いんですね（笑い）。あのー、あたしの親友がベトナム人なので。

調査者：ああそうですか。

むつみ：はい。アジア人だったらー、あのいろいろ、親のカルチャーちゅうか、そういうことが似てるのでおつきあいがいいですね。はい。

調査者：ああ、似てるっていうのはどんなところで。

むつみ：あのうやっぱり、中学のときは白人の親友が多かったんですけど、

調査者：ああ、そうですか。

むつみ：はい。あのー、あ、遊びにいくときとか、その日の直前に聞いてきたりして、やっぱり直前に聞いてくるのはちょっと急かなと思ったり。でもアジア人の親とかは、そうやって、３日まえに知らせてくれとかそういうことが似てたりー。ま、そんなに、ワイルドなことをしないようにとか。

調査者：そのー、白人のお友だちはわりとワイルドなことを《するんですか？》

むつみ：そうですね（笑い声で）。

調査者：ふーん。

むつみ：あのう、ディズニーランド、あのディズニーランドに朝の３時ぐらいまでいたりそういう、そういうことしますから。

調査者：はい、はい、はい。

むつみ：あのう、アジア人の親とかきびしいから。そういうことがないから、そうですね。

調査者：ああ。やっぱり、10時ぐらいには帰ってくる？
むつみ：はい。
調査者：もっと早く帰ってくる？
むつみ：はい、それでやっぱりアジア人の親は、あの、ステレオタイプとかもあるんですけど、その、子どもにすごく勉強を押し付けるほうなので、みんなアジア人の友だちやっぱりあたま良くて、真剣に、学校に行ってるから-、はい。
調査者：ふーん。

白人の友だちは「ワイルド」だから友だちでいられないということだが、具体的に「ワイルド」とはどういうことかがＴ11で話題となっている。「遊びに行くときにその直前に聞いてくる」ことや、「ディズニーランドに遊びに行って、午前３時までいる」といったことだ。ディズニーランドはＳ市から車で数時間で、高校生が週末に遊びに行く場所としてはよく行くところなのだろう。ディズニーランドにグループで遊びに行くこと自体は問題ないが、その予定を直前に言われたり、帰ってくるのが夜明け前となるのが問題であり、アジア人の親には認められない。みんなが３時までいるつもりなのに、自分だけが「10時に帰らないといけない」と言っても、白人の友だちには「わかって」もらえないというわけだ。

むつみはそのようなことを子どもに許さないのは日本人にかぎらず、アジア人に共通の「カルチャー」の問題だと言っている。これと関連することだが、学業へのプレッシャーが強い点でもアジア人の親は似ているという。アジア人の高校生の多くは「真剣に学校に行」き、「あたま良」いということになっている。

たとえば、カリフォルニア大学バークレー校はアジア系の入学者が「多すぎる」状況にある。高校時代の成績やSATの得点といった基準のみで選抜するとそういうことになってしまう。[14] 「ステレオタイプ」かもしれないがとむつみも留保をしながら話しているが、「モデルマイノリティ」（Louie 2004）と呼ばれるように、子どもに学業に励むようにプレッシャーをかけるという点でアジア系の家族は共通している。

７−５　インターネットを介してのコミュニケーション

ここまで、調査対象の高校生がどんなひとを「友だち」としているのか、現地校や補習校、「遊び」に行くときはどんな様子なのか。そこでは、「文化」がどのようなかたちを取っているのか。使用言語との関係はどのようなものか、などを見てきた。

つぎに、メディアが交友関係とどのように絡み合っているのかを見ておこう。情報技術の発展が、アメリカ西部のＳ市において言語文化的に日本に近い生活を送るのを可能にしている。かつて日本にいる親戚や友人と連絡をするためには、郵便のほかには電話しかなかった。時差と高額の料金を気にしながら電話をかけたものだ。インターネットの普及により電子メイルが使えるようになると、時差を気にする必要もなく、料金も以前の国際通話に比べるとはるかに安い。たとえば、ひとみも「日本にいる友だちと連絡を取るのはメイル」と言っている（Ｔ12）。

Ｔ12　「メイルは日本にいる友だちと」（ひとみ）

ひとみ：メイルは、あんまりメイルしないんですけど、メイルはやっぱり、日本にいる友だちと連絡とるときはメイルなんですね。で、ほかの子たちは、あのfacebookとか、そこだとみんな英語ですね。日本人でも、やっぱりfacebookはアメリカのだから、英語で話してたりするからそのときはぜんぶ英語ですね。
調査者：え、facebookていうのは、あそこに書き込みもできるんですか。
ひとみ：それは、なんか、自分のプロフィールみたいのページがあって、それをつくってるのはfacebookていうところにつくってるから。そんなかで自分の友だちさがして友だちになると、自分のfacebookのプロファイルにいけて。そうするとそこで会話ができたりとか、そこでチャットもできるんですね。で、写真ものせられるし。でもなんか日本のブログとちがって、なんか毎日なにがあったとかそういう話は書かないんですけど。そこでなんか、自分の写真のせて、会話す

るだけってかんじですね。
調査者：どんな会話、もしあれでしたら、
ひとみ：あ、そこで、毎日お話するっていうひとは、遠いとこに住んでると、メイルとかしてるんですけど、学校がおんなじだと、あしたなにしようとか簡単なメッセージぐらいしかあんまりしないですね。

ひとみは時差のある日本の友人とはメイルで連絡を取る一方、S市にいる友だちとはfacebookでつながる。facebookは、mixiのようなソーシャルネットワーキングサービスだ。承認した相手だけがアクセスできる。メイルをしたり「チャットもできる」。「写真ものせられる」。現地校の友だちとは「あしたなにしよう」といった話をするぐらいだ。

日本の高校生のあいだでは、携帯電話の所有率は９割を超えている。たとえば、Benesse教育研究開発センターが2004年11月から12月にかけて行った自記式調査では、6051人の高校１年生と高校２年生が回答している。携帯電話を「もっている」と回答したのは、高校１年生の92.5%と高校２年生の93.0%となっている。[15)]

ひとみはどうだろうかと南はＴ12に続く部分で携帯電話使用について尋ねた（Ｔ13）。

Ｔ13　「携帯でテキストメッセージ」（ひとみ）

調査者：その、携帯はおもちなんですか。
ひとみ：あ、持ってます。
調査者：それは、いつするんですか。
ひとみ：携帯で、テキストメッセージですか。
調査者：うん、
ひとみ：それは、１日中してます。
調査者：授業中とかも？
ひとみ：はい。してます。
調査者：見つからないように？
ひとみ：見つからないように（笑い声で）。
調査者：それは、英語で、日本語で。
ひとみ：ええっと、日本人の子は、日本語ーーのときもあるけど、でもやっぱり、日本語は打てないから、ローマ字になっちゃうじゃないですか。
調査者：あーそうなんだ。
ひとみ：そうすると、やっぱり、ローマ字だと読みにくかったりすると、あるフレーズは英語だったりとか。日本語英語ってかんじですね。でも、現地校の子だったら、ぜったいに英語ってかんじで。はい。
調査者：この先生、おもしろくないなとか。早く終われとか。
ひとみ：いや、そういうことは話さないですけど、なんかたとえば、話してたことがあったりすると、なんかそのbreakのあいだに話が終わらなかったこととか、つづきだったりとか、あとは、きょうこれしたほうがいいねとか、これしようとか、なんかそういうかんじ。あんまりわたしは、ほかにもいっぱいなんか友だちとかで、あー授業つまんないって途中で、テキストしてくる子とかいるんですけど、そういうのあんまり好きじゃないんですね。だから、ちゃんとした会話だったらするんですけど、なんか、つまんないよーーとかいわれても、へえーーてかんじで、終わっちゃうんですね。だから、あんまりそんなのしないですね。
調査者：けっこうしてるんだ、みんな。
ひとみ：はい。

公共交通機関が不便で自家用車による親の送迎に移動を頼っているＳ市の高校生にとって、携帯電話は生活必需品だ。迎えにきて欲しいという連絡を携帯電話で行うのは当たり前なのだろう。「いつ使う」のかという調査者の問いかけに、ひとみはそういう使用法ではなく「テキストメッセージ」をするのはいつかということかと確認している。

そして、友だちとのテキストメッセージのやりとりは「１日中してます」と答える。授業中もしていて、教師に「みつからないように」している。「笑い声」と注記したが、ちょっといけないことをしているという自覚を示す話し方だろう。

使用する言語は、日本人とでは「日本語」だが、「ローマ字」しか使用できないために「日本語英語」となる。「日本語」といっても「ローマ字」表記であり「読みにく」いものとなっている。

「あー授業つまんない」といったメッセージを送ってくるクラスメイトもいるが、ひとみはそういうやりとりには応じないと言う。休み時

間（「break」）にしていたおしゃべりが途中で終わったのをフォローするようなメッセージはひとみも応じることがあるようだ。

7－6　マスメディア接触

北米には朝日新聞と日本経済新聞の現地印刷版があり、１ヶ月100ドル前後で講読することができる。調査協力者６人のなかでは、じろうの家庭だけが日本の新聞を購読していたが、じろうはとくには読まないということだった。

調査協力者の高校生たちはニュースをインターネットとテレビから得ているようだった。みきこは、家庭で使っているＰＣのブラウザを立ち上げるとMSNの日本語のトップページが開くようになっている。それで気になる記事をクリックして読んだりする。総じて、日本人高校生のニュースへの関心はそれほど強くない。日本語だから、英語だからと使用言語によって読む新聞や見るテレビニュースが変わっているといったことはないようだ。

テレビジャパンという日本語放送を契約しているのは、ひとみとみきこ、むつみの３家族だった。これは１日24時間日本のテレビ番組を流している。ほとんどがNHKの番組だ。みきこはこれとレンタルヴィデオとを活用して、「日本でやってるドラマほとんどぜんぶ（見てます）。ふつうの日本人より詳しいところあると思いますよ」と言っていた。アメリカのテレビは「あんまり興味ない」と言っているのと対照的だ。

むつみはNHK連続テレビ小説『だんだん』に「はまっている」ということだったが、ほかの４人はそれほど日本のテレビ番組は見ていないようだった。ひとみの家ではテレビジャパンを契約しているものの、ひとみがそれを見ることは少ない。「テレビを見る時間がない」し「ＰＣで見れる」から、見るとしたらそちらで見る。これは、おそらくYouTube上のヴィデオクリップのことだと思うが、テレビ番組がYouTubeで見られるようになっていることは多い。

7－7　むつみのＰＣログから

アメリカの高校生にとってＰＣは学習に必須である。注記したように（注12）これを聞いた日本の高校生はあまり納得できないようだったが、現地校の９年生、４年制高校の１年に在籍しているよしみにとっては、14歳の誕生日に買ってもらったMac Bookは生活の友だ。

一番使っているのはジャーナリズムの授業のためだ。この授業では、Ｓ市の地方紙を読むという課題が毎週出ている。記事をウェブサイトから「コピー＆ペースト」で引用して、コメントをつける。ＰＣを使ってウェブを見たり、ワープロソフトでエッセイ（小論文）を書いたりしている。

この授業では、学期中に長文エッセイを２回作成する。こちらは「学校新聞の記事」となりうるようなものだ。よしみはすでに市販薬による薬物依存問題について記事を書いていた。現在取り組んでいるのは、学校のそばに住むことの利点というトピックだ。前者のときはウェブで関連資料を探すとともに、Ｓ市教育委員会のひとにインタヴューすることも必要だった。

後者の学校のそばに住む利点というトピックは、よしみ自身が高校まで歩いていける場所に住んでいることから選ばれた。彼女自身の体験がアイディアの源泉だ。そして、ウェブ上で類似の論文を探して参考にしている。たとえば、「A short walk beats the school run: It's more convenient to live close to the classroom, but Dara Flynn learns that you will pay dearly for the privilege of being near a top school」という2005年８月７日付の記事がイギリスの『Sunday Times』のウェブサイトに掲載されているが、よしみはこれを参照しながら自分のエッセイを修正していた。

スペイン語の授業では、英語で書かれたチョコチップクッキーのレシピをスペイン語に直す課題が出されていた。友だちから文例がメイルで届き、これを修正する作業もしていた。土曜日の夕方にこのメイルへの返事を書いていたが、昼間は補習校に行っていて返事が遅くなったと書いている。この課題に取り組む途中には、facebookの自分のサイトをチェックしたり、好きなK-pop（韓国系ポピュラー音楽）のファンサイトを見たりしている。

Ｔ14　友だちとの話題のひとつはAsian pop（よしみ）

よしみ：でまた、アジア人のグループだとちょっと

日本人、あたしのまわりにいる日本人ってちょっと少ないので、韓国人とかが多いんですよ。だからその、アジア、Asian popの話とか。

調査者：ほーお。あ、Asian popっていうジャンルもあるんだ。それは、なに？

よしみ：あ、J-pop, K-popとか、ぜんぶ含めていう。

調査者：ふーん。それは、そういう話で通じるわけだ。

よしみ：はい。

調査者：ふーん。でそれは、あなたも聞いてるわけですか。

よしみ：はい。

調査者：ふーん。えっと、それは韓国人がうたってんの。韓国系アメリカ人がうたってんの。

よしみ：いやあのう、日本人の歌手とか、韓国人の歌手とか、中国人の歌手とか、みんなごちゃごちゃで。もう。

調査者：英語で。それぞれの国のことばで？

よしみ：いや、英語でしゃべるんですけど、

調査者：いや、その、歌のほうは、

よしみ：あ、歌のほうは、英語と、ぞれぞれの国のことばで、

調査者：ふん。で、韓国語で歌ってたりするのも、聞いたりするんですか。

よしみ：はい。

調査者：これいいよ、とか言われて。

よしみ：ん。とか、自分でちょっと見たりとか（笑い）。

調査者：ああ。でそれは、iTunesとかでダウンロードしてきて。

よしみ：はい。

調査者：ふーん。そうなんだ。

Ｔ14はよしみがだれといっしょにランチを食べているかという質問に続く部分だ。中学校ではアジア人が少なくて白人の友だちが多かったが、高校になってアジア系の生徒が増えて友だちもアジア系が増えた。それで、よしみは白人とアジア系の２つのグループといっしょにランチを食べている。ランチのときの話題は見た映画や音楽の話が多いが、白人とは「わたしはファンではないんですけど」Jonas Brotherといった白人ミュージシャンを話題とする。だが、アジア人とのおしゃべりで話題とするのはAsian popだと言う。

調査者はそう言われても知識がないために「それはなに」と説明を求めている。韓国人の友だちから情報をもらったり、「自分でちょっと見たり」して好みの曲を見つけ出す。図２はよしみのiTunesのプレイリストの一部である。安室奈美恵やいきものがかりといった日本人ミュージシャンのほかに、東方神起やEpik High、Big Bangなど韓国人ミュージシャンの作品もリストに挙がっている。

みきこは好きな日本人ミュージシャンとしてMr.ChildrenとKAT-TUNを挙げた。非アジア人ではT-PainとJustin Timberlakeが好きだ。ごろうはEXILEという日本人ミュージシャンのファンだ。以前はNe-yoという黒人だったが、最近はEXILEがいちばんのお気に入りになった。ひとみもEXILEはよく聴くということだった。じろうはあまり音楽を聴かない。むつみは「日本の音楽もよく聴くようになった」とＴ３で言っていたのは見たとおりだが、好きなミュージシャンまでは聞いていない。

図３もよしみのＰＣ画面のキャプチャーだ。ジェロという黒人演歌歌手のプロモーションヴィデオをYouTubeで見ようとしているところのようだ。その後ファンになったかどうかは不明だが、黒人演歌歌手というとやはり気になるのだろうか。

この時期のよしみのお気に入りは、Wonder Girlsという韓国人グループのようだ。日本語では「ワンガ」と呼ばれるこのグループの日本語のファンサイトに以下のような書き込みをしていた（Ｔ15）。

Ｔ15　ウェブサイトへの書き込みから（よしみのＰＣログ）

（略）

なんと、ワンガはインターナショナルのファンサイトみたいなのを作ったのでみなさんぜひアカウントを作ってからコメントしてください！

それはワンガとワンガのスタッフ自身がアップするホームページなんですよ～。

（略）

［続いての書き込み］

図２　よしみのiTunesプレイリスト

図３　YouTubeのジェロ

あ、すみません、どうやってアカウントを作るのかを説明するのをわすれてしまいました。。。

まず、ウェブサイトについたら、右下の部分に注目してください。

そしたら、青いスペースのなかのJOIN THE NINGIN COMMUNITYをクリックしてください。

２。Member Registrationっていうページが出てくるはずです。

最初の空欄はペンネームを入れる部分です。そこに三文字以上の英語のネームを入れてください。

二番目の空欄：　名前　（ファーストネーム）できれば英語で。

（略）

よしみが書き込みを推奨しているウェブサイトは、「インターナショナルなファンサイト」で、英語で書かれている。それに書き込むようにと、日本人向けに登録方法を日本語で説明（「どうやってアカウントを作るのかを説明」）している。それほどに、Wonder Girlsが気に入っているということだろう。

よしみの家では、テレビジャパンを契約してはいない。DVDレンタルショップに行って、オリンピック報道や映画、お笑い番組の「ヴィデオ」を借りてくるということだった。よしみは、YouTubeで音楽以外のヴィデオを見ることはあまりしないようだ。

7-8　マンガと読書、テレビゲーム

日本のマンガは海外でも広く読まれている。マンガを読みたいと日本語学習を始める若者がいるほどだ。Ｓ補習校の高校生もよく読んでお

り、教室でマンガを貸し借りすることも多い。ある日の昼休み、お弁当を食べながらの話題はアニメのキャラクターだった。また宮崎駿のアニメ映画『崖の上のポニョ』は人気で、自分たちで制作した学校紹介ヴィデオはこの作品からタイトル（『崖の上のＳ校』）を得ていた。

調査協力者たちはそれほど熱烈なマンガファンというわけではないようだった。例外はよしみだ。彼女は小さなころは兄たちと『ドラゴンボール』や『ドラえもん』を読んでいた。だが、最近はあまり読まない。ただ、趣味でマンガを描くことはあるそうだ。

他方、読書としては、じろうが司馬遼太郎のファンであるのは前述した。じろうが読んでいた乃南アサと伊坂幸太郎の『グラスホッパー』のほか、東野圭吾や重松清といった作家名がほかの協力者から挙がった。携帯小説の『恋空』と『君空』を読んでいる高校生もいた。日本語の読書を奨励するために、みきこの父親は、小説を読んでその感想をメイルするよう娘に課しているということだった。

ついでに英語での読書に言及しておく。最近読んだ英語の小説として『Twilight』をひとみは挙げた。これは「『ハリーポッター』みたいなかんじでだれもが読む人気の本」ということだった。じろうは英語の学習のため母親に勧められて週刊誌『Time』を読んでいた。

総じていうと、多忙な日々のなかでわりと読書に時間を割いている。現地校の授業中には読書の時間がある。読書をしたり自習をしたりして、ひとり静かに学習する時間である。この時間の効果もあるのかもしれない。英語にかぎらず、日本語のものもわりあいに読んでいると言えるのではないだろうか。ちなみに2005年のNHK調査によると、日本の高校生は「雑誌・マンガ・本」を平日には平均23分読んでいる。ただし、行為者率は31.4%であり行為者平均では１時間13分だった（NHK放送文化研究所編 2006: 250）。

テレビゲームについては、インタビューで南から積極的に話題とすることはしなかった。だが、じろうとのインタヴューでは級友との会話の話題として言及された（Ｔ16）。

Ｔ16　「ゲームせんからついていけない」（じろう）

調査者：高１は日本語がとくいなひとが多いということですか。

じろう：だと思います。仲いいのはへんなひとばっかりですね。おしゃべりで、行動もへん、と思います。ぼくも行動がかなりおかしいと思われてます。ふつうじゃないのは、自分でも自覚してますけど。ひとの会話についていけないとか。ゲームとかポップカルチャーとかそういう会話は下手です。

調査者：そういうのが好きじゃない。

じろう：するんですけど、みんなほど、ゲームせんからちょっと。ついていけないぐらいです。

Ｔ16は、補習校でのクラスメイトについてのやりとりである。仲良くしているのはちょっと変わった「へんなひと」だと言う。自分も「行動がかなりおかしいと思われて」いる。「ひとの会話についていけない」のだが、ゲームやポップカルチャーが話題の中心だからだ。じろうは「みんなほどゲーム」をしない。だから、会話に「ついていけない」。

ニンテンドーＤＳやWii、ソニーのプレイステーションといったテレビゲームがＳ市の日本人高校生のあいだに深く浸透していることがわかる。さらに、おしゃべりの話題としてテレビゲームが重要であることもわかる。じろうは音楽をあまり聴かないために、「ポップカルチャー」の「会話は下手」である。ゲームもあまりしないので、会話に参加するときに苦労するというのである。[16)]

８　おしゃべり活動への参加と文化アイデンティティ

言語使用を中心に見てきたが、「文化」が「言語」と分かちがたく結びついていることが強くうかがわれる。マイケル・エイガーという言語人類学者はこの点を指摘して、「こと文化（langaculture）」ということばを作り出しているほどだ（Agar 1994）。

７節の最後で取り上げたゲームと会話についてのじろうの発言（Ｔ16）は、メディアのコンテンツがおしゃべりの話題として重要である

ことを示している。では、そういったおしゃべりは具体的にどのようなものなのだろうか。本節ではＳ補習校での昼休みのおしゃべりの事例を提示し検討して締めくくろう。南が観察した授業日には高校２年生の教室で10人の生徒がお弁当を食べていた。そのうち６人が丸く向かい合うように座っていた。その後ろに２人の男子生徒が並んで座り、左側には男女１人ずつが前後に座っていた。

並んで座った男子２人はiPodで音楽を聴きながら、英語でたまにおしゃべりをしていた。前後に座った男女はマンガを読みながらお弁当を食べていた。ときたま日本語で短いやりとりをしているようだった。

中央の６人は日本語でおしゃべりしていたが、その話題は最初しばらくアニメのキャラクターだった。男子生徒の１人がファンでこの話題をリードしていた。そのあとYouTube上のヴィデオクリップが話題となった。確認していないが、おそらく『日本の形（The Japanese Tradition）』の「鮨」（http://www.youtube.com/watch?v=0b75cl4-qRE）だと思われる。寿司屋での食事の仕方を説明するものだが、パロディとしてふざけた内容となっている。たとえば、盛り塩について、「しょうゆの塩分が物足りなかったひとのために店の外には塩が盛ってあります。無料サービスですので、自由に食べましょう。」というナレーションとともに、客がこれを舐める映像が流れる。

Ｔ17　寿司の正しい食べ方（Ｓ校高２の昼休み）

01　Ａ子：なんかYouTubeで、なんか。寿司の正
02　　しい食べ方みたいの。だれに見せても
03　　らったんだっけな。
04　Ｂ子：みち？
05　Ａ子：いやわかんない。だれか、補習校のひと
06　　だった。
（略）
11　Ａ子：ばかにしてるだけなんだけど日本人を。
12　Ｂ子：ああ。
13　Ａ子：それで塩があったのにさあ、なんかさ
14　　あ、塩おいてあんじゃん、お店のとこ
15　　に、
16　Ｂ子：ん、
17　Ａ子：それさあ、
18　Ｃ子：え、なんのとき？
19　Ａ子：おみせのところ。そとにさ、塩おいてあ
20　　るじゃん。
21　Ｅ男：わざと？
22　Ａ子：え、なんか。魔除け？
23　Ｅ男：［ああ。
24　Ｂ子：［ああ。そういうことあるねえ。
25　Ａ子：なんか、
26　Ｃ子：なんでし：
27　Ａ子：なんか。
（略）
31　Ｅ男：なんか、おまじない。
32　Ｃ子：ああ。雪が溶けたりする。
33　Ｅ男：あと、固くなる。溶けて：固くなる。
（略）
41　Ｂ子：ああでも。なんか、塩がまいてて。
42　Ａ子：ん、ん。塩が置いてあったりするんだ
43　　って。
44　Ｅ男：食べたことある。
45　Ａ子：ん、そ、食べたの（笑い）。
46　Ｂ子：え？
47　Ａ子：あYouTubeのなかでよ。
48　Ｂ子：ああ（笑い）。
49　Ａ子：それが、正しい：日本のお寿司の食べ方
50　　とかいって、ほんで：、お店：さいご
51　　に、出たら、さいごのデザートは塩とか
52　　いって、お店の外にある塩とって食べん
53　　の（笑い）
54　Ｂ子：（笑い）
55　Ａ子：ほんでさあ、それさあ、アメリカ人とか
56　　が信じてやってたらちょうウケルなとか
57　　思って。
58　Ｂ子：あ、ほんとだ。

Ｔ17がそのトランスクリプトだ。ほかのグループの発言もあり、聞き取りにくいところがある。同時発話の部分はとりわけ聞き取りにくく「（略）」として起こしていない。同時に発話が開始されているところは左ブラケットで示している。コロンは母音の引き延ばしである。

塩を舐めるという話題がでたときに、女子生徒のＡ子がこのヴィデオの話を持ち出した（Ｔ17の01行）。このときは１人が話の輪から外れ

て５人で話していたが、ほかの４人はこのヴィデオを見たことはないようだった。Ａ子は、ふざけている、本気にされたら困ると発言していた。「それさあ、アメリカ人とかが信じてやってたらちょうウケルなとか思って」（55-57行）というわけだ。

「盛り塩」という慣習についてはみんな知らないようだった（19-33行）。だが、知らない程度に、Ｃ子とほかの３人とに違いがうかがわれる（Ｄ子はまったく発言していない。だが、会話に耳を傾けて「参加」しているようだった）。まったく盛り塩を見たことがないＣ子と、なんとなく見た記憶があるＡ子とＢ子、そしてＥ男という対比である。Ｅ男の「なんか、おまじない」（31行）という発話はＣ子に向けられたものだ。

Ａ子の「魔除け？」（22行）やＥ男の「おまじない」（31行）は、盛り塩そのものについて知っているわけではないが、塩が特別な象徴的意味を日本社会において持つと知っていることを示している。Ｂ子は、もともとのＡ子の発話（01-02行）の宛名として選択され、最後に「あ、ほんとだ」（58行）と受けてこの連鎖を締めくくっている。同じ程度の文化知識を有する存在としてＡ子から見なされているようだ。

このようなやりとりに参加することが、文化アイデンティティの構成にとって決定的に重要なものであるように思われる。つまり、日本の文化知識を持たない「アメリカ人」と、自分たちとを対照化している。日本文化の「担い手」として、会話のなかで、会話を通じて自己を位置づけるということをしている（西阪 1996）。

補習校に通っていないむつみには、このような「おしゃべり」を定期的に行う機会はない。むつみの日本の文化知識はＣ子とそれほど違わないかもしれない。そうだとしても、日常的にこのようなおしゃべりに参加することで、自己の位置づけを確認する機会を持つことになる。文化アイデンティティの変容を迫られるかもしれないが、その答えもその場で得られるような機会である。英語のほうが得意であるためにおしゃべりの輪にくわわっていない２人や、マンガに夢中になっている２人。そのような「正統的周辺参加」（Lave & Wenger 1991=1993）の形態もある。これらの選択肢も含めて、補習校の昼休みはおしゃべり活動という対面コミュニケーションを提供する社会化の機会となっている。

本論文においては「コミュニケーションエコロジー」を導きとしてきた。７節では場面ごとの言語使用で分けた。だが、「社会化経験」を理解するためには、分析単位をさらに細かく設定する必要があるのではないかと思われる。Ｔ17のようなおしゃべり活動が文化アイデンティティ形成、社会化経験に持つ意義を探求していくことが今後の課題であると確認して結びとしたい。

注

１）　本論文で使用したデータの収集は、南の海外研修中に行われた。調査協力者の高校生とその家族、Ｓ日本語補習授業校のみなさんに大いなる感謝の意を表したい。また、海外研修受け入れのMichael Cole教授および比較人間認知研究所（LCHC）のメンバーに感謝する。本論文は、2009年３月のLCHCでのトーク「Cultural Identity and Socialization Experiences of Japanese High School Students in S-City: Interview and Time Management Log Study」および、これの短縮版である、2009年６月21日の成城大学オープンキャンパスミニ講義とに基づくものである。

調査は、2008年11月から2009年３月にかけて行われた。協力者の学年などは調査時のものである。なお、本論文中ではすべて仮名とした。倫理上の配慮から組織名などを特定していないところもある。

２）　本論文中のインタヴュートランスクリプトは、Jeffersonたちの会話分析の記号を使ったもの（たとえば、Schegloff 2007: 265-269）ではなく、読みやすさを優先して作成している。調査者の相づちはかなり削り、言い間違いの修正などもあまり入れていない。表現や文末も統一するために変更したりしているところもある。「トラン

スクリプト」と呼ぶべきではないのかもしれない。パーレンに調査者による補い（身ぶりや発話の特徴など）を入れ、音の引き延ばしをダッシュで示している。特に、ことばの補いは二重山がたで示す。強調して発話された部分は太字とした。

3）　宮崎学という動物写真家がいる。野生動物の「野生のまま」の生態を写した写真で有名だ。その宮崎も、最初は野生のカモシカが「どう見えるかがわかっていなかったので、見つけられなかった」と立花隆に語っている：

そのころ、幻の野生動物といわれていたニホンカモシカを何とかして撮ってやろうという野望にとりつかれましてね、それから数年間、カモシカに熱中しました。ぼくもそのときはまだカモシカを見たことがなかったんです。きくと、カモシカは相当の高山地帯で生活しているという。そこでまず地元の山岳会に入りましてね、登山技術を教えてもらったんです。それからは土曜になると一人でテントをかついで山に入り、日曜の夜まで南アルプス、中央アルプスの山々を歩きつづけるということをくり返しました。しかし、カモシカはほんとに幻の動物でした。はじめてカモシカの姿を見るまでに、山歩きをはじめて半年もかかったんです。カモシカをこの眼で見るまでは、写真でしかその姿を知らないわけです。それで、自然の風景の中にカモシカがいて、それを少し遠いところから見たらどう見えるかということが全くわかっていなかった訳です。写真で見たカモシカのようなイメージがどこかにないかとキョロキョロする。ところがそういうものはどこにも見えない。そういう探し方じゃだめなんですね。遠くの緑の中で、茶色のゴマ粒のようなものがちょっと動いたような気がした。双眼鏡でそこを見たらカモシカがいた。感動しましたよ。そうか、自然の中ではこんな風にしか見えないのかと思いました。それまでもおそらくカモシカが見えるところまで何度もいっていながら、どう見えるかがわかっていなかったので、見つけられなかったんですね。いったん、どう見えるのかがわかってからは、簡単でした、それから山に行くたびに見つけられるようになったんです。それにしてもカモシカというのは自然の中で実に堂々としていて、いいんですね。見つけるまでに半年もかかったこともあって、感激もひとしおで、よし、こいつの生態写真を徹底的に撮ってやろうと決心したんです。（宮崎 1988: 120-121）

4）　Coleたちの研究は、後にMcDermottにより書物の一部として発表されている（McDermott & Varenne 1992）。

5）　あるひとが話す言語については、「第一言語（first language）」と「第二言語（second language）」という、接触・獲得順序に基づく区別がある。さらに、二言語話者（bilingual）の場合は、２つの言語のうち、どちらが優勢か、「得意か」という区別ができる。「主に」話されている言語という意味で「primary language」と英語では言っている。表１では、自己報告に基づいて、日米どちらの言語が「得意」であるかを表記した。

6）　補習授業校は日本の学校制度にしたがって在籍学年を決めている。アメリカの制度は12月あたりで学年が分かれるので、４月１日で分かれる日本の学年との組み合わせが子どもの誕生日によって異なる。また、アメリカの制度では個別の事情があれば、学年を調整するということもある。子どもの英語の負担を考えて、ふつうより下の学年に入れるということは日本人家族のあいだでもしばしば行われている。

7）　インタヴューで使用した機器を挙げておく：音声録音には、オリンパスのLS-10というICレコーダにオーディオテクニカのステレオマイクAT9745を接続して使った。128kbpsステレオモードでMP3ファイルに録音した。ヴィデオカメラはソニーHDR-SR12を、マンフロットの三脚にセットして使用した。最高画質のFHモード（16M

bps）でオートフォーカス設定とした。外付けマイクは使用せず、音声が聞き取りにくいときはICレコーダのものを利用するという方針だった。

8） 本論文では、「行動」と「活動」ということばを互換的に使っている。NHKは「行動分類」と言っている。「テレビ視聴」は「行動」だろうが、「ともだちとのおしゃべり」は「活動」のほうが良いと南は考える。この点は、将来まとまって論じたい点だ。本論では特段の区別なしに使っている。

9） 一般的には「施設内倫理委員会（Institutional Review Board; 略称IRB）」と呼ばれるが、S大学では、人間調査保護プログラム（Human Research Protection Program）と呼ばれていた。

なお、滞在先の研究室も調査フィールドの確保という問題に悩んでいた。子どもの学習を学部生たちが補助する「第5次元（Fifth Dimension）」というプログラムを長年にわたり実施して、これを調査のフィールドとしてきた。だが、公立小学校でのデータ収集はフィールドノーツ作成に限られ、録音や録画は認められなかった。そこで、2007年ごろからは、ある低所得者向け住宅団地内の子ども会活動センターを新たな調査サイトにしていた。それでも、倫理委員会での承認を得るための書類作成にはかなり神経を使っていた。

10） 25人ほどの在籍者で「約」をつけている理由を説明しておこう。週に１回の補習校では、どの時点で在籍しているかを厳密に言うのはむずかしい。担当している教師にとっても、ある生徒が何回か欠席していると思っているうちにやめていたということがある。他方、「見学」として来ているうちに、正式に生徒として在籍していたということもある。

11） NHKの2005年の調査は、「10歳以上の国民」を対象として、層化無作為２段抽出法でサンプリングを行っている。「調査相手」は12600人である。「高校生」であることは、調査の結果判明していることである。サンプル構成比は、平日で3.2%、土曜日が3.5%、日曜日が3.3%となっている。

12） アメリカの高校生にとってＰＣは学習に欠かせないという話をしたところ、日本の高校生からどのようなときにＰＣを使うのかという質問があった。学校のための家庭学習でＰＣを使うことが想像できなかったようだ。「学習」のありようの日米差を示唆するエピソードかと思われる。

13） Ｓ補習校高等部での学習時間をもとに、現地校の「日本語」の単位として認定する制度がある。調査対象の高校生にもこれを利用している生徒がいると推測されるが、今回の調査でこの点を確認してはいない。

14） カリフォルニア大学バークレー校の学生は、2007年年初の時点で41パーセントがアジア系である（Yang 2007）。たとえば、「College Confidential」というサイトにはこの点を取り上げた書き込みとコメントが見られる（http://talk.collegeconfidential.com/university-california-general/58675 4 -does-uc-berkeley-have-bias-asian-students.html）。以前はアフリカ系やラテン系は「優遇」されていたが、住民投票事項209が1996年に成立して、入学者選抜において人種や性、エスニシティを考慮することが禁止された。その結果アフリカ系やラテン系の入学者が減少している。

15） これは「第１回子ども生活実態基本調査」とあり、Benesseのウェブサイトから報告書のpdfファイルがダウンロード可能となっている（http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2005/index.shtml；2009年11月アクセス）。調査対象者は高校単位で選定しているが、それについては以下のように書かれている：

> 市区町村の人口密度と人口規模を考慮して、以下の3地域区分を設定。
> ・「大都市」（東京都内）、「中都市」（地方中規模都市：人口密度が中／人口規模が20～30万人程度）、「郡部」（町村部：人口密度が低／人口規模が1～2万人程度）
> ・各地域区分に該当する市区町村のなか

から、ランダムに複数の市区町村を抽出。

・抽出した複数の市区町村から、さらにランダムに学校を抽出し、調査を実施。

※なお、高校生については、上記3地域区分に加え、学校の種別や偏差値層の影響も考慮してサンプルを抽出した。

回答率については「データの集計にあたって、一部の項目では、学校単位で「無回答・不明」が多かったため、学校単位で集計から除外した」という記述が見られるが、「回答率」に相当する数値は見つからなかった。

16）　私事となるが、南も小学校高学年の息子のテレビゲーム問題をかかえている。家庭の方針として買い与えていないのだが、子どもは欲しがっている。聞くと、級友と遊ぶときにいっしょにテレビゲームをすることが多いようだ。欲しい理由がそれだけなのか、ゲームそのものがやりたいのか不明である。いずれにしても、「友だちといっしょに遊ぶため」という動機は小さくないようだ。

引用文献

Agar, Michael. 1993. *Language shock: Understanding the culture of conversation.* William Morrow.

Bronfenbrenner, U. 1979. *The ecology of human development:Experiments by nature and design.* Harvard University Press. = 1996. 磯貝芳郎他訳『人間発達の生態学：発達心理学への挑戦』川島書店.

Bronfenbrenner, U . & Morris, P. A. 1998. The Ecology of Developmental processes. In Lerner, R. M. ed. *Theory.* (Handbook of Child Psychology, vol. 1). Wiley.

Cicourel, A. V. 1982. Interviews, surveys, and the problem of ecological validity. *American Sociologist* 17: 11-20.

Cole, M. 1992. Culture in development. In Bornstein, M. & Lamb, M. eds. *Developmental psychology: An advanced textbook.* Erlbaum. 731-789.

Cole, M. , Hood, L. , & McDermott, R. 1978. Ecological niche picking: Ecological invalidity as an axiom of experimental cognitive psychology. Rockfeller University.

Erikson, E. H. 1959. *Identity and the life cycle.* International University Press. = 1973. 小此木啓吾他訳『自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房.

Erikson, E. H. 1963. *Childhood and society.* Norton. = 1977; 1980. 仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房.

Erikson, E. H. 1968. *Identity: Youth and crisis.* Norton.

Gibson, J. J. 1979. *The ecological approach to visual perception.* Houghton Mifflin. = 1985. 古崎敬他訳『生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社.

Goffman, E. 1967. *Interaction ritual: Essays on face-to-face behaviour.* Doubleday. = 2002. 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為：対面行動の社会学』法政大学出版局.

Kobayashi, S. 2008. Labeling Groups and Space: Discourse and Spatial Positioning of Social Identity among Transnational Japanese High School Students. Ph. D. diss. University of California, Santa Barabara.

Lave, J. & Wenger, E. 1991. *Situated learning: Legitimate peripheral participation.* Cambridge University Press. = 1993. 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書.

Lightfoot, C. , Cole, M. & Cole, S. R. 2009. *The development of children.* 6th ed. Worth Publishers.

Louie, V. S. 2004.4 *Compelled to excel: Immigration, education, and opportunity among Chinese Americans.* Stanford University Press.

McDermott, R. P. & Varenne, H. 1998. Adam, Adam, Adam, and Adam: The cultural construction of a learning disability. In Varenne, H. & McDermott, R. 1998. *Successful failure: The school America builds.* Westview Press.

25-44.
南 保輔. 1998.「日本人」という公的社会的アイデンティティ：帰国子女の「日本人」意識を考えるために.『成城文藝』161: 160-148.
南 保輔. 2000.『海外帰国子女のアイデンティティ：生活経験と通文化的人間形成』東信堂.
Minami, Y. 2007. Discourse of change among young Japanese sojourners: A case of "I've changed. "『成城文藝』200: 278-256.
箕浦 康子. 1984.『子どもの異文化体験：人格形成過程の心理人類学的研究』思索社.
宮崎 学. 1988. 動物カメラマン宮崎 学. 立花 隆『青春潮流』講談社文庫. 105-127.
NHK放送文化研究所. 2006.『NHK国民生活時間調査報告書』PDFファイル. NHK ウェブサイトよりダウンロード.
NHK放送文化研究所編. 2006.『日本人の生活時間2005：NHK国民生活時間調査』日本放送出版協会.
西阪 仰. 1996.「日本人である」ことをすること：異文化性の相互行為的達成.『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』金子書房. 73-103.
Schegloff, E. A. 2007. *Sequence organization in interaction*. Cambridge University Press.
Super, C. M. & Harkness, S. 1997. The cultural structuring of child development. In Berry, J. et al. eds. *Handbook of cross-cultural psychology*. Allyn & Bacon. 1-39.
Yang, J. 2007. Will UC Berkeley become a um, historically Asian college? http: //www. racialicious. com/2007/01/08/will-uc-berkeley-become-a-um-historically-asian-college/（2009年12月アクセス）.

付録1　行動分類一覧

コード	行動分類	説明
1	睡眠	30分以上連続した睡眠、仮眠、昼寝
2	食事	朝食、昼食、夕食、夜食、給食
3	身のまわりの用事	洗顔、トイレ、入浴、着替え、化粧、散髪
4	療養・静養	医者に行く、治療を受ける、入院、療養中
5	仕事	なんらかの収入を得る行動、準備・片づけ・移動なども含む
6	仕事のつきあい	上司・同僚・部下との仕事場のつきあい、送別会
7	授業・学内の活動	授業、朝礼、掃除、学校行事、部活動、クラブ活動
8	学校外の学習	自宅や学習塾での学習、宿題
9	炊事・掃除・洗濯	食事の支度・後片づけ、掃除、洗濯・アイロンがけ
10	買い物	食料品・衣料品・生活用品などの買い物
11	子どもの世話	授乳、子どもの相手、勉強をみる、送り迎え
12	家庭雑事	整理・片づけ、銀行・役所に行く、病人や老人の介護
13	通勤	自宅と職場の往復、自宅と仕事場（田畑など）の往復
14	通学	自宅と学校の往復
15	社会参加	PTA、地域の行事・会合への参加、冠婚葬祭、奉仕活動
16	会話・交際	家族・友人・知人・親戚とのつきあい・対面でのおしゃべり
17	電話	
18	電子メイル	
19	スポーツ	体操、運動、各種スポーツ、ボール遊び
20	行楽・散策	行楽地・繁華街へ行く、町をぶらぶら歩く、散歩、釣り
21	趣味・娯楽・教養	趣味・けいこごと、鑑賞、観戦、遊び、ゲーム
22	インターネット使用	
23	テレビ	BS，CS，CATVの視聴も含む
24	ラジオ	
25	新聞	朝刊・夕刊・業界紙・広報紙を読む
26	雑誌・漫画・本	週刊誌・月刊誌・漫画・カタログ・本を紙媒体で読む
27	CD・MD・テープ	ラジオ以外で音楽を聞く
28	ビデオ	VHS・DVDを見る、テレビ録画は含めない
29	テレビ録画を見る	
30	休息	休憩、おやつ、お茶、特になにもしていない状態
31	その他	
32	不明	
33		
34		
35		
36		
37		
38		

付録２　生活時間記録用紙

Day, and Date　　Name　　Time Management Study YMinami

AM	2:00	2:15	2:30	2:45	3:00	3:15	3:30	3:45	4:00	4:15	4:30	4:45	5:00	5:15	5:30	5:45	6:00	6:15	6:30	6:45	7:00	7:15	7:30	7:45	8:00
AM	10:00	10:15	10:30	10:45	11:00	11:15	11:30	11:45	12:00	12:15	12:30	12:45	13:00	13:15	13:30	13:45	14:00	14:15	14:30	14:45	15:00	15:15	15:30	15:45	16:00
PM	18:00	18:15	18:30	18:45	19:00	19:15	19:30	19:45	20:00	20:15	20:30	20:45	21:00	21:15	21:30	21:45	22:00	22:15	22:30	22:45	23:00	23:15	23:30	23:45	0:00

AM	8:15	8:30	8:45	9:00	9:15	9:30	9:45	10:00																	
AM	16:15	16:30	16:45	17:00	17:15	17:30	17:45	18:00																	
PM	0:15	0:30	0:45	1:00	1:15	1:30	1:45	2:00																	

付録３　音声記録公開承諾書

成城大学文芸学部　　南　保輔
157-8511　　**東京都世田谷区成城６－１－２０**
yminami@seijo.ac.jp

音声記録公開承諾書

プロジェクトの一部として、本調査プロジェクトにあなたが参加しているあいだにあなたの音声記録が作成されます。この音声記録の使用方法としては以下のものが考えられます。これらのうち、あなたが快諾し同意されるものを選んでください。どのような使用方法を認めるかはまったくあなたのご自由です。音声記録使用の際は、いかなるときもあなたの氏名が明かされることはありません。また、いつでも記録を止めるように言うことができます。すでに録音された記録のどの部分でも削除するように要請されるのもご自由です。

１．音声記録を本調査プロジェクトのために調査チームのメンバーが使うこと　＿＿＿＿
サイン

２．音声記録を学術論文で使用すること　＿＿＿＿
サイン

３．音声記録を人間発達・社会化；アイデンティティ研究；エスノメソドロジー・会話分析
に興味関心のある研究者の会合で分析対象とすること　＿＿＿＿
サイン

４．音声記録を教室で学生に聞かせること　＿＿＿＿
サイン

５．音声記録を一般の聴衆への講演で使うこと　＿＿＿＿
サイン

あなたには、録音中に記録を止めたり消去したりすることを要請する権利があります。

わたしは、上記事項を読んで、上記に示したような音声記録の使用に同意し許可します。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

生徒署名　　日　付　　保護者署名　　日　付

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

調査者署名　　日　付

Cultural Identity and Socialization Experiences of Japanese High School Students in the U.S.A.: From a Communication Ecology Study Using Interviews and Time Management Records

Yasusuke MINAMI (Seijo University)

yminami@seijo.ac.jp

http : //weblab.seijo.ac.jp/yminami/

ABSTRACT

Six 'Japanese' high school students in S city, in the Western U.S.A., were interviewed about their daily life experiences and cultural identities. Five of them kept time management records over a four-day period. One of the five students also collected logs of her PC use with iShowU software.

The six students in this study were busy going to and studying at local high schools. They had many Asian-American friends. In comparison with high school students in Japan, they spent more time on studying at home and using PCs. Compared with Japanese people in S city twenty years ago, the six students of this study had conducted their daily lives using Japanese language more, thanks to the development of information technology. Consequentially, they had better command of Japanese and felt comfortable being "Japanese" living in the U.S.

While five students attended a Saturday Japanese supplementary school and enjoyed talking to Japanese friends there, the sixth student did not attend the supplementary school and had a kind of identity crisis: "I don't know 'what I am culturally' these days." It is concluded that while the development of information technology has made information/developmental ecology of Japanese high school students in S city more like those of comparable students living in Japan, that chatting activities in Japanese during lunch break at the supplementary school is critical for establishing cultural identity for Japanese high school students living in the U.S.

KEY WORDS: information/developmental ecology, overseas Japanese, biculturalism, iShowU, Japanese supplementary school